

と鳴く。鈴蟲に駒も勇むや。くつわ蟲。ギンハルフシたれ松蟲の。聲澄みて。濁る時なき清瀧の小
 オクリ瀬々の。網代木水車。廻れく品よく廻れくるり。くるく。まだくるくるりきんりきり
 くたよくと。波に揺らる、川柳枝垂柳は。風に揉る、都の牛は。車に揉れてオドリ歌とッろ。
 とッろと轟の橋にしばく。フシ休らへば。もの鵜の鳥の。群れ居るに。驚く魚を追ひ廻し
 かづき上げすくひ上げ。隙なく魚を食ふ時は罪も報も後の世も忘れ果てつ、面白や。ハルフシけ
 に思ひ出し。石和川石に御法を書き留めて。弔ふためしも有栖川いざとて諸共手を合せ妙法蓮
 華の手向草。江河のうろくづ山野の獸草木國土。浮かま占野に並の岡。此こそな、のやのだけ
 のしちく舟岡鷹が峯見やり。見かへり眺めこしやうく。北野に 三重 着き給ふ。地然る折節
 時平は北野下向と打見えて。編笠深く顔隠し下人少々召しつれて。冥淵らしく來りしが姫君と
 行違ひ。詞はて田舎者さうながよい風のと。地立止まつて眺れば姫君笠を押し傾け。足早に行
 き給ふ後姿歩みぶり。八幡堪忍ならぬわと追つ付き御手を引止む。高則が妻押退けてこれな
 う。詞田舎者と見て侮り給ふか。主あるお子をしやほに大膽なといへば。なに主がある。其の
 主のあるが面白い。此の上は無理と出る兆とむすと抱き顔を見て。ヤ。お事は雨夜ならずや。

地扱よい所で出會うたりこれは北野の引合せと。供の者ども諸共にひしくと取圍み。無體に
 引つ立て連れ行けば時雨あまりの悲しさに。詞やれ狼藉者あたりに人は在らざるか。地あれ取
 返し給はれと起きつ。顛びつ追ひ行くを散々に叩き伏せ。跡をも見ずして連れ歸るは情。なう
 こそ 三重 見まにけれ。フシ御所にもなれば。地先づ母君に押し隠しとある一間に連れ行きて。
 詞やい爰ないたづら者。何に不足あつて抜け出てはありけるぞ。親の合點せらる、上は否でも
 應でも我が女房。従ふや従はぬや早く返事をさらへ出せと。地眼をいら、けはつたと睨み、フシ
 牙を嚙んでぞ嚇しける。地姫君ちつとも恐れ給はずいやこれなう時平殿。詞先づ心を静めて思
 うても見られよ。地自らは誰あらう。天下に一人の關白の娘。いうてもお事は武士ならずや。
 たとへば母の不合點にて契約はせられうとも。末代家の瑕となれば御身と夫婦になる事は。ふ
 つふつ思ひ寄らぬぞや。フシならぬぞならぬと仰せける。地時平いよく腹を立て。詞何さ關
 白の娘とて女房にせられまい物か。此の上は男の我。適天子の娘なりとも女房にして見せう。
 是非いやならば暇にはこれ。地これなるわと太刀をすばと抜きけれども。姫君これにも怪轉な
 く。詞やあ道知らずの悪人め。地如何に慾に耽ればとて眼前世嗣のある家を。横領せんとして自

らを妻にせんとは扱いか。せめて氏ある身ならばこそ。賤しき下々の分として攝家の跡目を望む事。天命知らずの驕り者これにつけても母上の。檀食邪見の心から如何に繼しき子なればとて。妾が爲には兄なるを疎み妬みであの如き。放埒無慚の下々ばらを。夫に持たせん聲にせんとは扱情なき心入やと恨み。かこたせ給ひけり。地時平飽くまで恥しめられ最早堪忍ならぬとて。既に討たんとせし處へ母上駈け出で縋り付き。こは情なしお事は氣ばし違ひしか。姫が行方の知れざれば在るにも在られずいつとなく。泣き歎きしを知り乍ら歸ると知らせぬのみならず。殺さんとは扱如何にお事は妾が敵かや。殺さでかなはぬ道ならば。先づ我からと縋り付きスエテ悶えこがれて。叫ばるる。地時平母上を取つて伏せ。詞なに婆婆塞ぎ面倒な。地死に度くば死なせんと胸元を三刀に刺殺し押伏する。姫君氣も消え心消え。なう情なや母上を何の科にて殺せしぞ。口惜しや自らが女の身の果敢なさは。親を殺せし敵をば目の前に置きながら。何とせん方あら恨めしの浮世やと流涕。こがれ歎かるる。地時平えせ笑ひホ、。詞結構な有様ちつとさうも御座るまい。先程よりの悪口の返報いでく暇取らせんと。地飛びか、り膝に引つ敷き柄も拳も碎くるばかり。フシ刺し貫くぞあはれなる。地今は存念晴らせしと死骸を引立て見て

あれば。有難や姫君の。御守曼陀羅をづたくに刺し通し。題目より流るゝ血はたゞ。フシ瀧つ瀬の如くなり。地時平呆れこは如何に。野狐の所爲かと思廻せば思ひも寄らぬ廣椽に姫は佇みおはします。エ、無念や仕損ぜしと側に掛けたる長刀を。柄長く押つ取遁りさじと走りか、つて丁ど斬る。引つ外し飛上り長刀はたと踏み落し。其の際に曼陀羅を拾ひ上げ捲返し。フシ押戴きてぞおはします。地扱無念やと振廻はし苛つてか、れば弓手へこし。馬手へ踏ね越え飛びしさり。裾を拂へばこは如何に。虚空に昇じ持給ふ彼の曼陀羅を時平が眉間にはたと打付けらる。のつけにどうど倒れ伏し暫しが間悶絶し。なう耐へ難や勿體なや。十界互具の本尊より血を出せし嚴罰立ち處に報い來て。熱湯の責に逢ふあら悲しやと叫びぬる。口より猛火燃え上り五體の繼ぎ目くより。断れくりにさばけしはオクリあさまし。かりける苦みなり。地暫くあつて寄りこぞり元の形となりけるが。兩眼光り鼻高くさも凄じき羽がひ生ひ。我れ佛法に仇をなし魔道に入るを幸ひに。己れを掴みひしがんと思へども恐ろしや三十番神十羅刹守護し給へば力なく只今は立去るなり。重ねて思ひ知らせんと夕立つ空に風遠近の山河草木震動し。フシ矢を射る如く飛去りけり。地御所中一度に肝を消しあら有難やさりとては。かゝる貴き妙法の御宗旨

にならではと。老若男女二百人念珠を切つて今身より。佛身に至る迄能く持ち奉る。南無妙法蓮華經と唱ふる所の信心は。これぞ得入無成道即成就佛身なるわと悦ば。ざるこそなかりけれ。

第五

いで其の頃は延文中天下大きに早して。五穀果實の種を絶ち餓季野外に充ち満ちて。行人道路に倒るれば徒事ならずと帝より。諸國の神社へ奉幣使を立てられ神泉苑大井川。賀茂桂川の邊にて。諸寺の高僧貴僧に仰せ。大法祕法を修せらるれども。フシ遂に小雨も降らざりけり。地君宸襟を痛ましめ。朕が不徳なる故かと朝餉を止められ。綾羅に露をかけまくも。忝き寂慮にてオクリしばし御寢と。フシ見えけるが。地角髪結うたる童女一人忽然と現れ。帝に向つて宣ひしは。此の度天下旱魃し萬民憂に沈む事。一乘弘通圓頓の行者日像大覺といふ。二人の法師を倭人偽つて備前の國に流し置く。諸天龍神之を悲しみ。慈悲の雨露を惠まさず急ぎ兩僧を迎へ妙法の。法水を乞ひ受よけとありければ。帝御夢の中にして御身はいづくの人ぞ。名は何といふぞと御尋ねありければ。其の時童女戀しくは。尋ね來て見よ法華經の。八卷が奥の。地九みやう

かうたいと詠じ給ひ。フシ虚空に。上らせ給ひけり。地御聲に御夢驚かせ給ひ。こはそも不思議の次第やと諸卿残らず御前に召され。右の御靈夢一々御物語ましく。急に其の沙汰あるべしとくくとの宣旨なり。おのく驚き思召し宣旨に任せそれよりも。勅使を立てさせ給ひけるためし。少き三重事どもなり。フシ去るほどに。地日像大覺は佛神擁護の名僧ゆゑ。ふたたび帝都に歸洛あり扱勅詔に任せ降雨成就の祈のため御寺を龍華王院と改め。三寶四菩薩日蓮の御影の莊嚴善盡し。美盡しつゝ。素幡華鬘種々の香花を供へつゝ。金銀珠玉日に映じオクリ軒も。曇も光添ふ。地かくて日像大覺は禮拜恭敬ましく。第一の卷序品より一心不亂に讀誦あり。第三等雨法雨の文に至り給ふ時。雨夜の前佛前に聽聞申しおはします。大覺御覽じなうお事は雨夜の前にてあらざるか。我こそ昔の兄月光よと宣へば。あら有難の御事や候。恥かしながら今は何をか包むべき。我本人間にて候はず。長く蛇道の苦を請けし龍女にて候が。靈山會場の古へを。聞くにつけてもうらやましく此の御經たよらん爲。假に御身と連枝となる。いよく佛法堅固にして。フシ五濁の。衆生を。度し給へ。地我も像師の結縁にて。朝暮拜する曼陀羅の。妙法蓮華の功力により。變成男子疑ひなし此の報恩に今此の度。雨を降らし妙經の威力を現し

申さんと夕立つ。空の浮き雲を掻き分け。押し分け。三重へ飛行ある。地不思議や俄に如意が嶽の方よりも。電光頻りにて魔風梢を吹折り時平天狗飛び來り。龍女をはたと蹴落してテ、。潔よし若作障。碍即有一佛魔境の力今こそ本望遂けてあり。猶うき雲の關守ぞとフシ聲ばかりして失せにけり。地日像上人御覽じいかに大覺。捨邪歸正の行法只今なるぞと佛前に手を合せ。頭破作七分如阿梨樹枝の誓を現はし給へやと。一心に觀念しせめかけく祈らるる。法力忽ち金色の勿題目と現れて。雲中に見えけるが經といふ文字の兩の引きすて地に下れば。龍女悦び縋り付き。軒端に傳ふ蜘蛛のいとも。危く三重へしたひけり。フシ左右なく雲に。地乗せし處に又狗寶顯れ出で。扱懲りもなし己れいづくへ餘さんと羽風を立て翔け來る。龍女恐れて雲の足早く逃ぐるや妄執の。輪廻の黒雲渦巻きてくるりくと廻りしはせつなくも亦。三重へすさまじし地されども達多が法敵の。五逆の罪の例にや狗寶あへなくはたと落ち。大地二つにさつと裂け。オクリ奈落の底へ落ちければ。地日像不便に思召し大覺諸共高聲に。提婆品を讀誦あり。時に龍女手を合せ。南無妙法蓮華經と唱ふる聲の内よりも。即身即佛目のあたり。フシ有難かりける次第なり。地誠に妙なる法力にて魔障も我慢の焔消え。共に成佛得脱の蓬華に浮み出でし時。

御法の雨は車軸の如く都鄙遠近に降り渡れば帝叡感限りなく。此の度の御法施に宗祖日蓮大菩薩。日朗日像菩薩號さて大覺は大僧正といともかしこき論言の。今の世迄も留まりて宗旨繁昌國繁昌。詞五穀成就萬歲樂めでたかりともなか／＼申すばかりはなかりけり。

我等かたり本の通ちがひなく寫させ進せ候此外口傳とてさのみむつかしき事もなく候たゞ人の心を慰るを祕傳にいたし候しかしふし付は作意と文句のはだへが大事にて候祕事はまつけとやかしく

竹本義太夫
近松門左衛門團

京二條通寺町西へ入町北側
大阪高麗橋堺筋かど出見世

山本九兵衛團

東山殿子日遊

(八行四十八丁本)

扱も其の後、厚松根に倚つて腰をすれば、千年の翠手に満てり。梅花を折つて頭に挿せば、二月の雪衣に落つ。たのしみ飽かぬ諸人の齡を野邊の初子の日。千代の小松も今日よりは君にひかれて萬代のオロシ源氏の春こそ久しけれ。地こゝに足利の八代の公方。征夷大將軍准三宮源の義政公と申すは。政道に私なく。恩澤扶桑にあふれ武功日域に赫耀として。東求堂にましますば、東山殿とぞ稱じける。殊に風流の名匠にて萬の器財に御心をいたましめ。茶の湯の流れの末迄も東山時代とて。世以て是を賞玩す。姫君一方いまそかりける。ハル八雲の前とて十五歳。錦の褥綾の床玉垂深くましますば。唐李園の謝氏夫人。フシ春に化せるに異ならず。地扱又天下の執權に仁木入道郭了。子息彈正泰豊。畠山の持國大内介秀盛。其の外國守城主諸旗下雲の如く霞に似たり。スエテそもく年始の御祝ひ。地長閑き春に大福や。老が姿も若水の。フシ湯殿はじめ着

衣はじめ。馬の乗初め弓始め。御具足の御かきみ。曇らぬ御代は神風や。フシ伊勢蝦蟇穂依橋の。櫃かち栗打炮かすくのことぶきは。ありきやうありあら玉や。幾代の春を標に。いのち穂長のウギン注連飾は誠に目出度う候ひき。フシ千代のしらべの。松囃子。ハルフシ松竹飾る門前に。駒のたてどはなみ風も。フシ治まる。國こそめでたけれ。扱出頭の御小姓細川小左近勝元とて。ハル唐の陸郎我が朝の在羽林あざむく程の美男にて君御寵愛淺からず。生年既に十八歳。ハル忝くも御前にて額に角を入れよとて。則ち大内介秀盛を烏帽子親に定めらる。秀盛仰を蒙りてやがてオクリかくぞしたてらる。ハルフシ額に角いれ。地袖をつめ衣紋繕ひ罷出で御目見え仕る。君甚だ御感あり其の名を采女正と改め管領職になされ。扱重ねての御説には。調例年の子の日の遊は仁木入道設けなれども今年は歳徳巳午の方。地幸ひ勝元が館惠方なれば目出度く設け仕れと。簾中深く入り給へば勝元面目身に餘り。人々に禮義を述べ本所本所に立歸る。猶新春の御吉慶めでたかりける。三重次第なり。是は扱置き。地仁木入道郭了は。我が家になれば子息彈正泰豊を近付け。調我が君天下を靜謐に治め給ふも此の入道が。分別を木鐸として國家の仕置する故なり。恐らくは某が馬を鹿といふとても違背せんもの。今日本に覺え

す。何ぞや昨日今日迄竹馬乗りし小童に管領職を賜はり。剩へ毎年の例を外し。彼が館への御成は聊か堪忍なりがたし。地分別せよ彈正とフシきばを。かみてぞ申しける。地泰豊聞きもあへず御尤もく。詞誠にしやい(本ノマ)もなき御仕方其の上勝元めが。日頃人もなけなる出頭づら白癩胸わるく存するに。いでかけ行きて首提け參らんと股立か、け駈け出づる父暫しと押し止め。ア、短かしく泰豊。兎角いふも身を立てんため。地何とぞ智略をめぐらして恥辱をとらせひけを付け。ハルあらぬ様にもて扱はば自滅疑ひあるべからず。先づ此の度は何事なく子の日の御成の御供し。來らん時節を待たれよと其の日を遅しと三重待ちにけり。フシ程なく子の日に。地なりしかば君人々を御供にて。勝元が館に入り給ひ座敷をめぐらし御覽すれば。三幅對の懸物に硯文臺卓香爐。盆に入れたるさゞれ石スエテいはほと成りて松風の。ギン釜もたがりてしんくと。眞の臺子の置合せ。一輪生けし花迄も。風情あまれるもてなしは流石に。此の君の御近習育ちの物數寄と。フシおのく感ずるばかりなり。地扱さまくの蓬萊に千本の小松引添へてざん酒盛始まりける。我が君興に入らせ給ひ。いで勝元に引出物取らせんそれくと宣へば飼ひに飼うたる春駒を五匹までこそ引出す。爾も此の馬は慶雲院殿よ

り相傳の名馬。望に任せ擇りて取れ勝元謹んで頭を地につけ。誠にかゝるあばら屋へ御成さへ候に。剩へ御相傳の御馬拜受仕り候段。家の面目世の聞え兎角申し上げ難し。地然らば上意に任せんと。ハル庭上に降り立ち五匹の馬を見廻して。爾何れも劣らぬ御馬や候。就中三番に引かれしは早道の名にし負ふ電月毛候。地桐原だちか木曾だちか。追様向横端張骨あひ肉なみ爪根の節。鼻の嵐は法螺貝に牡丹を入れし。ハルコハリ如くなり。鈴をはつたる眼ざし。須彌の髪より見えたるは深山小菅が木枯に一揉みさつと揉まれしに。朝日のうつらふ斗りなり。胴骨はあら木の弓尾筒ふつさと筋太く。岩に聳えし瀧つ瀬のたぎつて落つるに異らず。前脛は唐竹を。ひしぎ。立てたるよめのふし龍吟すれば。雲起り虎嘯けば風騒く。天晴すときこほろぎ面眉間波分け三日月骨。ひつ腹太腹からみの節野髮鞍敷八九の骨。つつくり付けたる如くなり。此の馬を賜つて。若しもの事の有らん時眞先かけて功名し。名を萬天にあけんとて手綱かいたり頂戴す。器量といひナホス品といひ類稀にぞ見えにける。地郭了はハル日頃の意趣の上なほ偏執の色深く。爾ア、愚かなり勝元。總じて良き馬を持つものは其の身能く乗りてこそ持つべけれ。御分やうく木馬の乗り方ばかりの稽古にて。此の馬を望まるゝは悉皆寶の持ち腐らか

し。忝くも此の馬は。坂西一の口ごは馬容易くは乗られまじ。生きたる馬の乗りだてして落ちて怪我をせんよりは。地たゞ竹馬に乗られよとあざ笑つてぞ申しける。勝元氣色變りしが。ハルさあらぬ體にていやこれ入道殿。若輩者と思召し御なぶり候か。強戯れな宣ひそ。地但しは御酒が過ぎたるか。肴もなきに忝やと興になしてぞ申しける。詞子息彈正つづと出でいやさ采女。父入道が意見は御身を思つて言ふにあらず。必定あの馬に乗りだてし跳ね落されて腰骨を踏み折られ。御奉公を缺き給へば君の御爲如何なり。地是非それとても乗りたくば氣遣もなう鞍かけにて。馬事して慰まれよとフシかんらくとぞ笑ひける。地勝元今は堪られずこは推參なる雜言かな。詞所詮汝等が背中せなかに乗り。一馬場せめて見せんと飛びかゝらんとするを人々あわて立騒ぎ。こは御前といひ殊に目出度きお成りといひ。地眞平堪忍し給へと立重つて静めける。君も親子が雜言大人氣なしとは思すれども。流石天下の大老なれば兎角の批判も付け難く如何に方々。詞兎いふも角いふも皆我が爲を思ふ故なり。勝元若輩なる故血氣にはやつて是非を知らず。所詮其の馬に乗り了せば。望みし規模諸人への面目雪ぐ處なり。地はや／＼乗れと宣ふ時畠山進み出で。詞扱々聞く處ある上意感するに詞なし。去り乍ら庭乗も無興なれば今一人地乗

の相手を仰付けられ。地櫻の馬場にて上覽もやとありければ此の義尤も然るべし。さあらば用意仕ればやとく／＼と宣ひて。一座の人々御供にて櫻の馬場にぞ。三重出で給ふ。はれがましさは。地限りなしされども勝元ちつとも臆せずしづ／＼と乗出し。犬追物の。拍子にかゝつて先づひたオクリ地をぞ乗つたりける。地そも／＼。馬に七個の祕事。三がの手綱五かの鞍。陰陽の鞭あさ嵐。大おろし小おろしハツミはこびのべ足ちどり足。ハルフシあられ流しといふ断をおつ返し引返し。鎧の音も掛聲もあふりの風に誘はれて。天にも至る駿馬の曲面白かりける。三重次第なり。地御大將を初めとし。大名小名聲をかけ馬上の見事さ腰のよさ天晴乗つたり采女正。乗つたり乗つたり勝元古今無雙の若侍フシいや／＼どつとぞ褒めあぐる。地仁木親子は面目なく顔を赤めてす／＼と。二人つぶやき立歸れば采女は馬を乗り止め。詞いやこれなう入道殿。坂西一の荒馬を竹馬よりなほ易く乗り。最早をさめ候を見て歸られぬかと呼ばはれば。入道跡へ見向きもせず。いやさ見度くもないわさと地言ひ捨てて立歸る。御前伺候の人々は。餘りの事に興さめて。目ひき袖ひき息をつめくつ／＼。くつ／＼と笑ひけり勝元興に乗じつ。三遍五遍六七遍くるり。くるりと輪乗りして元の所に乗りをさむ彼の勝元が手柄の程。地我が君の悦喜

の體御代。萬歳の御吉相やと皆喜ば。ざるこそなかりけれ。

二段目

扱其の後。初春の御祝残りなく納りて。如月半うち霞みのどやかなる徒然に。姫君は女房達を召連れて。御花園に出で給ひ籠の小鳥の水を替へ。や、萌え出づる草花やスエテ菊の芽なんど摘ませらる。鶯雲雀百千鳥。囀る春は物毎に、フシ心浮き立つばかりなり。ハルフシ梅はかつく。うつろひて。櫻やうく、氣色だつ。枝の蜘蛛のいむつかしく。鶏呼んで取すれば。かれも少しはくだかけの。つまこいくと鳴く聲に雌鳥もオクリ同じく慕ひ來る。姫君は御覽じて。あかつき急ぐ鶏の聲人の戀路の邪魔なれどスエテ己が番の。わけは知る。ア、可愛らしやと宣ひて、フシ暫く。ハル眺めおはします。地こゝに仁木入道は細川采女に意趣あれば。其の仇を報せんと郎黨どもと相談し。大きな犬二三疋に細川采女正と札を書き。はやく解くるやうに結び付け物陰より忍び入れ。我が家を指して歸りける。犬は猛つて駈け入れば。人々これはと逃げ迷ふ籠の小鳥も羽根をつき御白洲も草花も耕す如く踏み散らし。雛を追つ詰めて引つ衝へ引つ衝へッシ皆散りぐに逃げ行きける。地姫君大きに御機嫌損じ誰人が犬なるぞ。扱狼藉や父上へ申し

上げんと宣ふ處に。落ちて在りし犬の附札女房達拾ひ上げ。讀みて見れば采女正勝元犬とぞ記しける。姫君いよくせかせ給ひ。扱は采女とやらんが出頭を功にきて。妾を侮ると覺えたり。地それ召寄せて此の體を見せ以後を示せと宣へば。御乳母の小督やがて表に走り出で采女正に對面し。扱御身様は無念なるお人かな。斯様々々の次第なり。地先づ此方へと言ひければこは心得ぬ事なるかなと。思ひながらも勝元は御簾のオクリ前に畏りハルフシ伺ひ居たる。地其の風情君を始め奉り。女房達に至る迄采女が色にうつろひて。詮索は脇へなり怒れる心もなよなよと。フシ見とれてこそはおはしけれ。防ぐにあまる戀風や。簾押し遣り姫君はたよくと出で給ひ。地なう小督笑ふ顔は打たれぬとや。地采女とやらんの業ならば。手飼の鳥も草も木も。何しに妾が、フシ惜しからん。父上の御寵愛も我が身のハル上に白菊の花の眞實いとしらしやと、フシしと。もたれて宣へば。地采女兎角に當惑し顔を赤めていふやうは。扱扱々思ひも寄らぬ御言葉。兎角御返事の仕様さへ術知らず候へば。地只御許し給はれと、フシ塵をひねりてほのめかす。姫君は聞召し。なう面弱き御方や。叱りも叩きもするにこそ。許せとは心得ず。さうした事では無いにとてなほ色深き體を見て。女房達は氣を通し。フシオクリそろり。そろり

と。はづしける。地勝元重ねて申すやう。恥かし乍ら某いまだ幼き時よりも。調殿様の御側に
 詰め。遂に女中へ言葉を交せし事もなし。地只々御免と立出づるを姫君やがて引止め。調いやい
 な事を宣ふものかな。女の道を知らぬ地とて何恐ろしきことあらん。けにや伊勢物語に假にも
 鬼のといひけるは。それは仔細も有馬山いにはあらぬ戀の道。思つたよりはほに興ある物ぢ
 やけな。御身も我も白絲の結ぶ始めの手習に。師匠も弟子も入らばこそとよれつ。もつれつ宣
 へば。フシ少しは亂るゝ花薄。穂には出でねど勝元も荒らゝかにはかなぐらす。誠に戀ひ焦れ
 ても月の中の。桂の如きお姿を拜む事も聞く事も。間遠にあめる伊豫簾。かゝる情の御言葉。
 露思かには存ぜねども。御恩深き殿様の御目をかすめ候事。如何にしても勿體なしつれなき言
 葉を御憎しみにて。思召し切り給へと理りせめて申しければ。姫君御色變りそゝろふるはせ給
 ひ。調扱もさもしやが自らが。女の身にて斯程にいふ思はくも願す身を庇ふ未練さよ。地女と
 こそ生れうすれ。妾もお事が主ならずや。よし／＼同じ主とても別け隔てあるならば。其の上は
 兎も角も。言はじや聞かじむつかしと突き退けて立ち給へば。こは御機嫌損ぜしア、是非もなし
 わざくれと。お腰をひたと抱き止める。調はて何しやる。いや。地さうな物強ひはせじと。宣ひなが

ら行み給へば勝元は途方にくれ。此の上は如何にして御仰を背くべき。何事も定まる業明日は
 闇浮の塵ともならばなれ。今宵必ず／＼と互に顔を見合せて。じつと握りし手の中にナゲフシ戀
 ぞ。つも。りてふち。は瀬に。かはる。ナガシとも君と我が中。かはらじと別れて。内に。ぞ三
 重入り給ふ。去る程に。地采女正勝元は我が館に立歸り。默然として溜息をつき。南無三寶如
 何にせん。地武士の道を立てんとすれば姫君の御恨み。又姫君を立てんとすれば君臣の禮儀を
 背く。白き糸の染まん事何れの色にや定むべき。誠なるかな幾何の人。こゝに至つて平生を誤
 ると。スエテ途方にくれて居たりしが。エ、實に思ひ出したり。身を立てんとする心より二つの
 道に迷ふなり。所詮所領を振捨て。某都を立退きて。男を立てぬ上からは。君の憎みも姫君の
 御恨みも残るまじ。忠義も戀路も身を捨ててこそ立つべけれと思ひ切りつゝ勝元は。君の寵愛
 身の富貴。浮べる雲と見なしつゝ表をオクリさして出でけるがハルフシ是を限りと。思ふにぞ。地
 とり傳へてし梓弓。心ひかれて立止まりスエテしばし御殿を見返りて。ギン行きては又見戻りて
 涙に。むせ。び。三重隠れ行く。フシ悪事千里を。地驅くる習ひ勝元行き方知れぬ由。御前に披露あ
 り大將大きに驚かせ給ひ。御機嫌勝れぬ折からに仁木入道參上し。調扱も勝元出奔の事某申

し上げ候へば偏執がましく候へども。申さぬも如何なり。是非に行き當り候と申せば君聞召し。なに憚る事かあらん早とくノと宣へば。さん候勝元勿體なくも姫君に心をかけ奉れども。姫君御承引なき故に。御前の聞えをせん方なく存じ落失せたりと承り候。日頃の御高恩を忘れ適憎き仕業やと憚りなくぞ申しける。君御立腹淺からず。我が眼力をかすむる科姫に向つて緩怠者甚だ其の罪輕からず。地急ぎ追懸討つて來れと即ち彈正泰豊に大將を賜はれば。願ふ所とお請を申し。手勢引具しそれよりも。取る物も取り敢へず揉みに揉うでそ。三重追つかくる是は扱置き。地細川采女正勝元は都を立退き行く程に。和州奈良坂にぞ着きにける然る處に。詞跡より大勢の聲として暫しくと呼はつたり。地勝元はつと驚き願れば我が家に召使ひたる者どもなり。こは如何にと待給へば我もくと驅け來り。詞此の度君の御出奔仁木入道あしざまに申しなし。則ち泰豊に討手を賜はる由承り候へば。御行末覺束なく山越に駈け抜けて馳せ參じ候と。地言ひも敢へぬに彈正は三百餘騎に物具させ喚き叫んで馳せ來り。詞やあ臆病者いづく迄か逃すべき。腹を切れとぞ呼はりける勝元につこと笑ひ。ア、傍痛や汝等が檢使にて切るべき腹は持たぬなり。數にもあらぬ蠅武者どもに首があれば口を利く。地ツメあれ打止

めよとありければ承りて味方の勢。一度にどつと入違へ。火水になれとぞ。三重戦ひける。フシされども味方は。地小勢なれども思ひ切つて戦へば追手はあぐんで懸り得ず。詞勝元小高き所に駈け上り如何に彈正。よい加減にして歸りはせで無用の深入り後悔すな。地ツメ是非それとても死に度くばいでく暇取らせんと。側なる大木引ん抜いて。群がる勢に割つて入りはらりくと。三重打散らし。フシ手ひどくなれば。地ツメ泰豊はこは敵はじと逃げ行くを後より兩足薙ぎ倒し飛びか、つて上帶取り遙かの谷へ取つて投げ。今ははや是迄と。家人どもと引別れ。キン心靜かに落行きける勝元が振舞を。見る者聞く者押並みな褒めぬ人こそなかりけれ。

三段目

去る程に。東山殿へは二條の關白基平公より御使遣はされ。詞御息女八雲の前の御事御嫁に乞受けられ度き由謹んで申しけり。義政御悦喜ましまして。仰の通り委細承り届け候去り乍ら。今一度思案を廻らし此より御報申さんと。地御返事ありければ。フシ使は。御所にぞ歸りける。地かくて。ハル義政公奥に入らせ給ひつ。詞斯様々と宣へば御臺所の御悦びフシ何に譬へん方もなし。地されども姫君うきくともし給はず赤面して宣ふは。斯様に申せば父母の仰を背く

に似たれども。誰人の讒奏にや采女正と自らは密通せしと浮名を流し。それ故に勝元は何處ともなく失せしとなり。地科なき者を科に落し。主なればとて自らが一人に見えん事。世の譏も候へば只勝元を召還され。事の實否のなき中は嫁入とては致さじと。スエテさし俯向いてぞおはしける。地我が君大きに御氣色損じ。詞エ、生小癩なる言分扱は彼奴めと密通せしか。地卑怯なる心底やとはつたと睨んで宣へば。姫君少しも悪びれ給はず。詞いや斯く申すも父上の御爲を思ふ故なり。上より道を立てざれば下其の仕置に従はず。地賞罰知らずの將軍と。呼ばれ給はんうたてさに斯くは申し候なり。勝元が科は妾が不義。妾が不義は父上の御恥にては候はずや。一期寡婦もある習ひ讒者の業と知るゝ迄は嫁入とては致さじとスエテ涙に。咽び宣へば。詞仁木入道聞きもあへずいやこれお姫様。それは過ぎつる事改めての御詮索は事を好むに似て候。恐れながら理を枉けて。上意次第になされよといへば君聞召し。いやとよ郭了。あの様なる不義者に意見をすれば弊なり。地いつかに心に思へばとて親に向つて利口だて。勘當なりと宣へば姫君御色變り延び上り。詞やあ郭了。汝には言分あれども御前なれば許すなり。地口惜しや親に捨てられ住む甲斐もなき世に在つては。神も佛も中々に心穢く見給ふらんと。守刀を

ずばと抜き情なくも緑の髪。ふつと切つて投出し母上に縋り付きわつと叫び給ふにぞ。各一度に度を失ひスエテこれは〜と泣き叫び。フシあわてふためく。ばかりなり。地君はいよ〜御腹に据ゑかね。重ね〜の不孝者。詞見れば瞋恚の種となるあれ畠山に預くるなりと宣ひて。地御座を立たせ給ひければ迷惑ながら持國は。姫君を御供し。私宅をさして歸りしはなう情なうこそ。三重見えにけれ去る程に。地仁木入道郭了はつく〜と思案して。いや〜姫の言葉の末如何にしても氣遣はし。若し勝元を召出され對決に及びなば我が身の惡逆あらはれん。所詮上意と偽つて。先づ持國に姫君を殺させ采女が行方も探させんと。文細々と認めて持國オクリ方へぞ送りける。フシ斯くとは知らず。地持國は何事やらんと押し抜き讀みて見れば姫君を。今宵の中に討ち奉れとの上意なりとぞ記しける。持國興さめこは如何に。討てとあるも主命討ち奉らんも主君なり。あはれ世の中にせまじきものは宮仕へ。侍冥加に盡き果てしとスエテ途方にくれて居たりけり。地爰に持國が獨娘に初霜とてありけるが。父の風情をほの見しより不思議に思ひ立出でて。なう何事かおはしまし。打しをれさせ給ふぞとあれば持國暫く答もなく。詞ヲ不審尤なり。必ず沙汰ばし爲給ふな。地情なや姫君を今宵討ち申せとの上意なり。如何に御

憎しみの姫君なればとて。譜代の主を我が手にかけ。そもやそも討たるべきか。去りながら討たでは又仰を背く。此の上は是非もなし御意に任せ姫君を。失ひ申し某も腹掻き破り死なんとは思へどもお事がさて。男子にてもあらばこそ七歳にて母に後れ。今又父に離れなば如何はならん不便やとて。フシ語りも。あへず泣き居たり。地初霜も興さめて。暫し物をも言はざりしが。御仰は御理り去りながら。主君を討つも助くるも弓矢取の習ひと聞く。只何事も定まる業。何とぞ思案もあるべきに先づ酒一つ聞召し。御氣を晴し給へとて。銚子かはらけ取出し父をオクリ諫めて酌しけり。地父は盃手に取つて。なう嬉しくも慰むる物かな。満足せり。ハル満足せり。さあらば一つと受ければ姫は莞爾と打笑ひ。いで自らが御看を申さんと。ハル袖より剃刀取出し海松房の黒髪を。ふつつと切て投出す持國はつと驚き。こはいかにと手をうてば。詞なう音高し音高し。最前自らが何とぞ思案と申せしは是にてこそ候へ。地如何に上意が重くして何たる科のましますとて三世の契の姫君を。御手にかけて申しては末代迄の家の疵。末世の苦患もフシ。恐ろしし。恐れながら自らは姫君様と同年にて。御顔ばせも似たるとや。幸ひかな自らが首を代りに討ち給ひ。姫君様の御首と御披露あつて我が君の。御怒を止め給はば父上は君への

忠。妾は又親への孝。孝といひ忠といひ何しに命の惜しからん。はやく討たせ給へやと。フシ勇み進んで勧めける。地持國いよく心消え。エ、汝は我が子ながら。適健氣なる心底やな。不孝なる子を殺せとの上意だにうたてき。何とて御身が殺されんつらきが上のつらさぞと聲も。ハルフシ惜ます泣き居たる。地姫も涙はせき來れどなう言ひがひなや父上様。男子と生れ戦争にて討死するも同じ道。時刻移らば御使重なり悔むにかひの候まじ。早とくくと首を延べ。勇むにつけて弱り行く。フシ親の心ぞ道理なる。地されども持國思ひ切り涙を押へ。詞扱は必定御命に代らんと思ふかや。地こは仰とも覺えぬものかな。姿こそ女なれ心は男にかはるべき。思ひ詰めて候と言へば持國聞いて。ヲ、神妙なり頼母しし。親子は一世といへども來世にては一蓮生。思ひ切りしぞ思ひ切れと引伏せんとはしけれども。流石蓄める花の顔。見れば目もくれ手もなへてさしもの持國わななくと。フシハルふるひて。時を明かざりき。されども心を取直し。エ、後れたりあさましし我が子と思へば不便増す。過去の敵が子と生れかゝる。難儀をかけぬらんと。思ひ定めてさあ只今なるは念佛申せ。南無阿彌陀佛。く。地くを力にて引伏せ首をふつつと切り。太刀を彼處にからりと捨て。空しき死骸に抱き付きスエテわつと消え入り泣叫

ぶ。地稍あつて起上り。ア、情なきは武士の道。扱はかなきは恩愛の別れ。助けて立つる道はあれど。殺して立つる道はなし。親を殺す子はあれど。子を殺すは我ばかり如何なる者が親となり。如何なる者が子と生れ。ギン我が手にかゝり初霜の。名さへ昔に成りけるかや。やれ今一度父かといへ。やれ物をいへ何とて返事をせぬぞとて。かひなき首を抱き上げさすり上げ悶え。フシこがれて歎きける。地然る所へ。ハル仁木入道の御出と訴ふる。持國驚き初霜が首の面に血を塗りて扱て入道に向ひ。詞先き程は是非もなき御書中それにつき斯くの如く討ち奉りて候。尤も御勘當の御子ながら現在のお主討ち申すさへ候に只捨て置かんと勿體なし。某御首申し請け弔ひ度く候と涙を流し申しける。入道打領き一段々々御心勞。最早某實檢の上は披露申すに及ばず。如何様にも宜敷計らひ給へ。さて此の事は一圓穩密との上意なれば必ず沙汰ばしし給ふな。御勤は能きやうに某言上申すべし。地誠に餘儀なき御仰さぞ御難儀とハル存すれども。武士の習ひ相互と上には實を飾れども。底には曇る悪心の。フシにこゝろ笑ひて歸りけり。地持國前後に忘れしが。いやゝゝ此の事姫君のつゆばかりも知らしめさば。御悔みいかゞなり。今宵の中にいづ方へも落し奉らんと思ひつゝ。姫君のお前に出で兎角偽りそれよりも。旅のい

となみせられける心の。内こそ三重哀なれ。道行フシあだし姿を。ギンなかゝゝに。ウタ見そめまいものうかゝと。うかれ心や。あだ心。うはの空なる。ギン八雲の前。フシオクリ立ち行く。末は。大和路や。フシまだ夜をこむる。あかつきに。人は伏見の里あれて。鳥羽山松の。フシあらしを聞けば。波こゝもとや淀川の。蘆間がくれに行く船も。フシわれをや餘所にへだつらん。フシ思ひきや花紅。葉見し折ならで。身を賤の女になさんとは。神も知らじな神も猶。戀をすればや男山。ハル麓の露をかごとにて濡れて立ちたる女郎花。井手の玉水岸越えて。フシおろす苗代山城の。こまの渡りの瓜つくり。民の仕業も穂に出でて。忍ぶにあまる初麥や。スエテ五十の夢の果しなば。消え易き身を知れとての。粟の鳴子はからころり。フシからりころり。ハルからゝと。おのがハル羽風に動かして。己れと騒ぐ。むらゝ雀。月の桂の狭穂川や。フシ蘭の梶とる渡守。スエテいざこと問はん三輪の山。ギン杉のふた本しるしのあらば。其の苧環をくりかへせ。ハルフシまた巻き返せ。あはれ昔にまきもくの。檜原が末も曇らねば。鐘も霞まぬ初瀬山夜半にや君がと詠じけん。龍田の嶺は風ふきて。ウタいと心。ハルギンおきつ白波。たつの市とはあれ。あれ豊浦。の御寺の。フシ西なるや。ハルフシ東やいづこ。しら鳥の羽交の。オクリ山

や飛鳥川。明日の淵瀬は知らねども。今日は嬉しき妹背山ギンハルフシうつす鏡も。はづかしき。姿の池や布留の宮。青葉の山もいつしかに。ギン浮世を秋の唐錦。紅葉亂るゝ神南備のみ。む。ろの里につき給ふハルフシ昔も今も。戀に浮き名は立つか弓。やたけ心も弱くなる誠に人のほだしなるわと皆こぞつて。語らぬ方もなし。

四段目

かくて其の後。移ればハルかはる世の習御いたはしや八雲の前。初霜が忠節にて。御命恙なく遁れ出で給へども。人目忍ぶの軒深くスエテ厭ひ入るてふ大和路や。三諸の里の片ほとりに。乳母が知るべ有明のフシかけを。隠しておはしけり。地憂き時つるゝ友はなく乳母餘りの詮方なさに。山雀といふ鳥を求め。徒然の御慰めにぞ參らせける。姫君は御覽じて。けにや慈鎮の言の葉に。籠の中も。ハルフシなほ羨し。山がらのギンオクリ身の程かくす夕がほの宿と。連ね給ひし言の葉も。今身の上知られたり。フシ山雀が山が。冷泉フシ憂いとて。里へ出て。君を都に身をやつし。山へ歸るも戀の道。里へ歸るも戀の道。こゝで悟のわをぬけて。オクリくるりゝと。品よくかへれも一つかへれ小オクリ輕き。羽風は。フシやさしやと。スエテ暫し慰み給ひける。地こゝ

に細川采女正は志を切にして。都をまぎれ出でけるが。思ふ人こそほだしとて心をだにも放らさず。さまよひ歩く其の中に放生供養の願を起し。山林江河里々を。編笠深く被りつゝフシ忍びゝに歩きしが。地三諸の里の賤の屋にて山雀の聲を聞き。詞召連れし小童に其の山雀を賣り給はば。價は望に任地せんと言ひ含め遣せば。童内へつるゝと入りつきもなくぞ言ひたりける。姫君童が手を取りて。ア、いたいけななりふりや。してあれなるは兄様か。詞よし誰にもせよ主。がいふと言ひ給へ。お望とあるならばふつつかには惜しまじを。價とあるはお若衆の。言葉には似合はぬと。地恥しめられて小童はフシ顔を赤めて出でにける。地勝元は是を聞き。心ありけな女かな某行きて所望せんと。編笠脱ぎ捨てつと入り御免といへば八雲の前。やあ。御身は勝元かなに姫君様かこれはゝと抱き付きフシ嬉し泣きにぞ泣き給ふ。地扱戀しさもゆかしさも取り交へたる其の中に。仁木が振舞持國が情。始め終りを語らせ給ひ。此の上はいづくへも御身一緒と宣へば。勝元つやく承り。有難き御心中兎角言葉にのべ難し。詞さり乍ら御仰に従ひては立てたる道も無となるべし。然ればとて見捨て申さんもいよく以て本意なき業。地是非の頓着にはつたと行當り候なり。けにや色慾の刃命をとる事莫耶の如く。

道をやく事火の如し。いかなる人が戀といふ思ひの種を植ゑそめしと。スエテ茫然として居たりしが。詞や。思ひ付きし事の候。大内介秀盛は某が烏帽子親。殊に仁義武勇に富み君の覺えも目出度きもの。彼が方へ御供し兎角の相談仕らん。いざさせ給へと申しければ姫君嬉しく思召し。男に任する女の身はいづくへなりとも連れ給へ。扱此の鳥は御身とわが二世の契の媒なり。いざや放ちて得させんと籠の口を押し開けば。鳥も悦び羽振り行く比翼の契ぞ。三種類なき。是は扱置き。地仁木入道郭了は御前に罷出で。しをくとして涙を流し押し俯向いて居たりけり。義政不思議に思召し。何事かある郭了覺束なしと宣へば。詞さん候便なき事こそ出で來り候へ。姫君様は假初の風の心地と候ひしが。御定業のはかなさは終に空しくならせ給ひて候。御病氣と申しながら畠山も迷惑仕り。御前をば某に能く申し上げ得させよとて。己れと出仕を止め候と誠しやかに言上す。地我が君大きに驚かせ給ひ。こはいかに淺ましや豫て病氣と聞くならば。勘當赦し今一度。親子の對面せんものを。ア、後悔や是非もなやとて。ッ御落涙は限りなし。地此の事奥に聞えしかば御臺氣も消え心消え。人目も恥ぢず走り出で義政公に縋り付き。なう我が子かへさせ給へさりとては。姫を返し給へとて伏しまろ。びてぞ泣き給ふ。我

が君詮方涙ながら。ヲ、道理なり我も猶。悔むにかひのあらばこそ。せめては姫が臨終の様。聞いてなりとも慰まんに畠山召せとある。詞時に入道遮つて御仰はさる事なれども。御臨終の御容體聞召しては猶御思ひの種。只御弔ひこそあらまほしう候へ。其の上持國も悲に堪へず。出家の望の御暇を某に頼み候間。召すとも伺公。地申さじとたつて止め申せども御臺所も我が君も。是非にと仰重りて御使立ちければ氣味わるさうに入道は。ッ桃尻に。なつてゐたりけり。地時刻移らず持國はやがて御前に參上す。君御覽じてこれへくと御座近く召され。地扱も八雲の前は病死せしと聞きたるが。地若し遺言にてもなかりしか。如何にと宣ひてスエテ又御涙に咽ばるる。地畠山はつと驚きこは心得ぬ上意と思ひ。詞さん候。姫君様の御事は。勿體なくも上意に任せ御首討ち奉つて候なり。別に御遺言も候はず。是非なきものは奉公の身と涙に咽び申しけり。君御氣色變らせ給ひ。何條持國氣ばし違ひたるか。仰背き難く討ちたるとは何事ぞ。心を靜めて確に申せ畠山いよく不審晴れず。いやいな事を承るものかな。討ち奉れとはあの郭了より申し參り。則ち御首は入道直に實檢し。必ず穩密にとの御事なる故今迄つゝみ罷在りし。但し表裏の御沙汰ばし申す者の候かと憚なくぞ申しける。入道聞きも敢へずやあ

血迷うたるか畠山。君よりの上意をば先づ此の入道は取り次がず。其の上御首實檢とは夢にも知らぬ。偽いつはりかな。目も腐くされ見申さぬとしらふくぞ陳ちんじける。畠山うち領うけつき。ム、扱あつかは御坊の表裏よな。これさ卑怯ひつちやう者。必定御意ひつちやうとて姫君を討たせ御首も見ざるよな。事によつて侍の偽るも習ひなり。たゞ御前にて恥をかゝぬうち有あり様に白狀せよと嘲笑わらわらつて言ひければ。入道爰は大事と思ひやがて御前にさし向ひ。御相傳さきでんの侍が斯様に狂氣仕る事さぞ御不便に思召されん。去りながら狂人を御前近くは恐おそあり。引つ立てさせ候はんといへば持國かつらくと笑ひ。ヲ陳ちんじたり申したり。いで狂人と佞人ねいじんが運うんくらべ致さんと。地懷中より狀一通取出し差上ぐる。我が君披見ひけんします内入道うろくくと目を配くばり。太刀をも取らず逃げ出づる各々これは何處へとて立ち塞ふさつて止めければ。地ちいやく少しくとて。オクリ彼方かた。此方こなたとよろたゆる。地君御立腹限りなく。我が子の敵かたき殊ことに又。國を亂す手練しゅれんの佞人行ふべき法もなし。それ計らへ畏つて取つて伏せ。高手小手に縛いめける。御臺此の由御覽じて。ア、果敢はかなやなあの入道を討ちたる。死したる姫が歸らばこそあならなつかしの我が子やと悶もえ。ノルノル歎かせ。給ふにぞ。地持國今は包み兼ね。御理ことわりなり去りながら御心安く思召せ。姫君様の御身代みかひりには某が娘を討ち。あの

入道めに首を見せ。姫君様は恙なく渡らせ給ふと言ひければ。御臺所も我が君も一度に御手をはたと打ち。扱あつか頼たのもしの親子やな。先づ其の姫はいづくにか。とくノと宣へば。畠山承りさん候姫君は。大内介が方に忍び渡らせ給ひ候。序ついでながら勝元をも。某が娘を討ちし御褒美と思召し歸參を仰せ付けられば有難く候はんと。地謹んで言上す御夫婦の人々。やれ罪も科も此の上うへに何かあるべきとくノと。しきつて御説ごせつありければ。秀盛持國悦んで二人のオクリ人を。誘い引いんすハルハル死したる人の。地又爰よみかへに蘇よみがへりたる風情ふうせいにて。フシ悦び泣きにぞ泣き給ふ。地さて腹癒はらせに入道をなぶり殺しにせよとある。詞郭了聞いて大聲をあけ。なう悲しやかゝる目出度き折なれば。御慈悲に命ばかりを助けてたべと泣きければ。地ち上から下に至る迄。フシ笑はぬ人こそなかりけれ。地ヲ、此の世は假の宿永き來世へやるべきなり。詞さり乍ら入らざる耳鼻あらばよしなき事を聞出し。閻魔えんまの前でも嘘うそつかんと畠山つつと寄り。地兩の耳をそぎければ秀盛は鼻をそぎ。願ねがひ切きり下ぐる姫君御覽じなう方々。詞あの大きな目の玉にて。ともすれば自らも女房達も睨にらみしに。つぶしてたべとありければ承り候と兩眼をつきつぶし。地さあ眼め耳鼻び舌身ぜつしんの六慾ろくよくは離れたり。成佛じやうぶつ疑ぎひあるべからず勝元引導いんどうすべしとて。太刀引ひん抜いて細首を

水も溜らす打落し。今こそ世界の悪魔を拂ひ。御代は萬歳々々と悦び。勇み立ち給ふ。ギンけにや天運循環し。逝いて歸らずといふ事なく信あれば徳ある事。恰も鏡に影映り響に。聲のおうおう。くくく目出度しとも中々申すばかりはなかりけり。

五 段 目

去る間。畠山持國は御前に罷出で訴訟申されけるやうは。此の度讒者の業として姫君の御命既に危くまじませし處に。某一人の娘を御身代りに立て恙なく渡らせ給ひ候。然れば持國は國家の救民となつて候。仰ぎ願はくば然るべき養子を仰付られ給はれかしと。ハル謹んで言上ある我が君暫く御思案あり。つらく道理を以て考ふれば。其の死したるは我が娘は最早汝が子。否といふべき處なし則ち汝に得さする條。養ひ取つて勝元にめあはせよとて忝くも勝元に。御重代の御佩刀品々添へて下さる。理正しき御仕置と。フシ下が下まで感じけり。地成就の日こそ吉日なれいざ祝言せさせよと。親子夫婦の三々九度。千秋萬歳の。フシ千箱の玉を奉る。地扱此の度の悦びには銀閣の山林に。吉野山をうつし花見の酒宴亂舞をなすべし。小小性奥の女房ども迄思ひくくの風流を盡し。姫が心を慰むべしはやくくと宣へば。人々悦びお請

を申し。既に用意を三重せられけり。ツレフシかくて我が君。地御臺所と諸共に銀閣に御出あり。御簾捲上げてみ吉野や。初瀬の山も今此所に。うごき出でたる如くなり。ハルフシ扱さまぐくの。出立の。色を盡せし其の中に。露まぎれなき八雲の前見かはす程の女房達。やつす姿は目狭笠金罎。オクリ梅華皮長い刀に。ウタ腰巻羽織。さつとそよめく追風は。花にまけじの燻き物かあただ浮世はあだ物の。蝶に。ウタなりたや揚羽の蝶に。たとへ主ある籬の花も。ギン露のまろねの。さんさお手。枕ふりく。ふつて出でたる。フシ振袖も。靡く煙の鹽釜や。匂ひ櫻や。八重櫻これや怪しき獸の。雲に吠えぬる虎の尾や。スエテ山ぶところに生ひ立ちて。姿いとほし小櫻の。なれてむつる。姥櫻。夕紅の。フシ火櫻や。雨は降り來ぬ同じくば。ハルフシ濡れてもやどれ。家櫻。名は恐ろしき花なれど。けにや女の黒髪に。小オクリよれつ。もつれつ繋がる。心かはゆき普賢象ハツミやたけ心の熊谷も。ハルフシ色に交はる。ハル伊勢小町花の情に誠のあらばかき寄せ。抱き寄せ。じつとしめたや絲櫻。鹽。ギン木に櫻折り添へて春を慰む須磨の海士。さかて櫻やうす櫻。トル楊貴妃櫻は。ハル。名にこそ立てれ淺黄櫻の中ならばふつつり。ふつつりはつたと思ひ桐が谷。ギン花の紐解く。烏帽子櫻をウタ來てみ吉野のえ。ギン來てみよし野の。山櫻。ち

ご櫻。餘所に見捨てて行く雁は。情の色の薄櫻しやんと浮世を。フシやなぎにやらで。何をうら
 みの墨染や。小オクリ彼岸。ざくらは。フシうつろひて。人は昔に替るとも。ハルフシもらすなく。
 漏さじ。ハル伽羅のかば櫻。厭へどさそふ春風があなたの枝へさらく。こなたの枝へさら
 さらさ。さつさつと亂れて。散つてこほれて露の白玉ころく。なづく手飼の犬櫻。何
 のいたりはなけれども。一重櫻はよい物ぢや。ア、くきやしや物ぢや。ハルなうまだ名も知
 らぬ色々の。花は様々多けれど。フシ語るにいかで及ぶべき。日も入相のこゑに。とかく
 花には物思ふ醉をす。むる櫛の前。物狂ひとや人は見んいざやかへらん。手毎に折つて家づと
 の。一枝は許したび給へ。あら面白やと戯れて各々内にぞ。三重入り給ふ。フシ既に其の日も暮
 方に御所を始め奉り。御家中の面々まで御迎ひの下人ども。家々の紋付きし提灯に火を點じ。
 列を引いて参りしは千萬オクリ燈の如くなり。地はやお歸りとの。めけばはつと答へて供奉の人。
 次第々々に振り出す我が君大きに御感あり。我も徒歩より行かんとて各々櫻を挿しかざし。ギン
 大宮人はいとまあれや。いとまあれやと口ずさみ悦び勇み歸らせ給ふ源氏の御代の末長く。
 なほ御子孫の御繁昌千秋萬歳めでたしともなか。申すばかりはなかりけり。

右此本依小子之懇望附秘密之音
 節自遂校合令開板者也

延寶辛酉孟春吉辰

加賀

椽

宇治

(重印)

好澄

二條通寺町西へ入町

山本九兵衛刊

戀塚物語

(八行四十九丁本)

扱も其の後序それ天は天たり地は地たり人にて人たらざれば國家大いに亂る。爰に神武七十六代。近衛の院と申し奉るは慈悲廣大におはしまし。凡そ諸道の廢れたるを興じ大河には舟小河には橋を架け。一事の善をも賞せられしかば。萬民其の徳を稱じ其の化にオロシ誇らぬ者は。なかりけり。地其の頃攝津の國渡邊の橋を架けさせ給ひ。既に成就せしと訴ふれば、急ぎ供養あるべきとの宣旨なり。攝政忠道承り。幸ひ渡邊黨の武士遠藤左近の將監持遠が一子。同盛遠を御前近く召され。此の度の橋供養の奉行職汝に仰付けらるゝの間。儀式嚴に相勤むべしはやとくとくと宣へば。盛遠面目身に餘り謹んでお受を申し。先づ御前を立ち給ふ。千世經る川の橋柱。ゆるがぬ御代こそ三重久しけれ去る程に。地此の度の橋奉行遠藤武者盛遠は。幼少の時よりも而長牛皮の童にて。心しぶとく聲高にて父が教訓をも聞入れず。人の制止をも用ひ

ず拔群の惡黨故。詞父彼に持て扱ひ筑紫瀧へ追下し置きしが。持遠死して後一門より呼び上せ。遺跡恙なく今年既に十九歳。地器量骨柄他に勝れ血氣盛んの折なれば。さも美々しく出立て伴廻りの侍等。美麗をつくしそれ〴〵に弓鏑長刀笠標。列を引いて飾らせ我が身は如何にも大様に。幕の中に着座して。眼をくばつて居られしは。フシ嚴しうこそ見えにけれ。地扱橋の渡初めには攝津の國の内にして。難波の大夫とて一女三男生みの儘に持ち。萬貧しき事なき大有徳者なり。則ち子供を引連れ橋の上に出でにけり。かくて番匠の棟梁飾り立てたる樽肴。橋柱に献じて後。己れ三献して奉行職へ奉れば。盛遠受けて大夫へ差す。あら目出度やと頂戴しこれも三献受け渡し。やがて子供に差しければ次第オクッ、次第に巡らして。地既に祝儀事終り埒を開けば我れ先にと。貴賤群集諸共に皆々渡り三重初めけり。フシやうく人も。地靜まりて後何人とは知らねども。優に氣高き上藤の。母ぞと見えしを伴ひ笠深々と着なしつゝ。供人少々召具してフシ靜かに運ばせ給ひけり。地盛遠幕の内より一目見て。こは天人の影向かと心もそぞろになり。詞やあゝ誰かある。あの上藤に用あるとて具して來れ急げとありければ。菌田の平藏承り。橋の上につかゝと行き。なうこれ申し。あれなる御奉行所より何やらんお

尋ねありたき由。ちと御立寄といへば乳母めのと聞いて。御奉行様の此のお子に何の御用があらん。しやあられもない事宣ひそと振切つて行くを見て。又追つかけ使を立て。橋供養過ぎて始めて渡る女人にょじんには。必ず御酒みさけを羞すむる地法なり。はやお歸りと申せども。人々聞かぬ風情にて足早に歩まるる。盛遠もりと盃さかずき持ちながら一散に駈かけ來り。しや上臈かみの手を取つて。地扱ぢあもくお情なや都人と見えけるが。それは餘りに心強し。一樹いちじゆの蔭かげに立寄るも他生の縁ゆかりと聞くものを。せめて一つ召上られ此方へといふ所へ。詞老母立歸りこは聊爾ちやうじやと押し隔て。見れば甥なまこの虎王なり。なう御身は持遠もちとの一子虎王にてはなきか。妾わらわは叔母おんあやまりの衣川ころもがはあれば又袈裟御前よとあれば。地さしもの盛遠はつと驚き盃さかずきにて顔隠し。赤面して居られしはフシ手持。無沙汰に見えにけり。地暫くあつて扱々久々にて御目にかゝりしが。詞お年も寄られず候。誠に假初かりそめながら七八年も逢ひ奉らぬ内に。袈裟御前の成人はつたと見忘れて候なり。定めて叔母君も御失念は御座あるまじ。此の袈裟御前七つの年某が妻にせんと父と父との契約なれば。いよく其の筈はな違はじといへば。叔母衣川聞給ひ。チ、左様の戯たはれ事を言はれしも知らねども。地御身父御の勘當受け。筑紫へと聞きしより其の後便たよりも聞かざれば。はや此の子は成人す。詞一昨年ととしの春の頃源の渡わたの方へ參ら

せ。地去年の秋孫まで儲けし事なれば。近頃本意なけれども。フシ是非なき事とぞ申さるる。地盛遠もりと氣色變つて是は不覺なる仕業かな。詞侍の一言黙も止難たがく。某は此の年迄未だ女を具せず候に。一旦いつたんの届つもなく渡わたに娶めせ給ふとは。是は叔母御おんあやまりの御誤ごごち。よしそれは兎も角も。先約なれば今日よりして某が女房ぞ。地渡わたに斷立ことわりてられよとフシぎごつ。なけにぞ申さるる。地叔母は大きに腹を立て。詞やあ虎王よ。そちは小ちひき時よりも。少しの事をも聲高こゑたかにとがくしき惡黨ゆる。地一人子なれども見限られ。田舎流浪の身となつても未だ昔が直らぬか。扱もく淺ましき無理非道なる男やとスエテ涙に。咽なび宣へば。詞盛遠大の眼をはつたといらうけ。エ、いつかに叔母なればとて人に面恥つらばかゝせ給ふものかな。此の上は渡が女房にもせよ誰人の妻にもせよ。先約は某いざく歩めと引つ立つる。叔母君袖に縋り付き。扱は是非を聞き分けず理不盡に奪はんとや然らば妾を殺して後兎も角も計らへ。生いけらん内は叶はじと猶々強く引き留むる。詞なに叔母とは言はせじと情なくも押伏せて。刀を胸に押當てさあ。くれうかくれまいか今言はれよと罵れば。地此の有様に驚き御供の人々フシ皆散りくくに逃けにけり。地されども袈裟御前少しも騒がず立寄りて。けに尤も御道理。自ら左様の先約をばゆめくく知らず候なり。此

の上は母御の合點なきとも。妾が御身に添ふべきにひらさら母を助けてたべ。なう助けさせ給へやと。スエテ手を合せてぞ歎かるる。地盛遠聞いてなに叔母の合點なきとも。御身夫婦にならんとや。詞ヲ、女なれども侍の娘なり。して渡が前は如何にして某には添はるべき。姫君莞爾と打笑ひ。地ア、愚かや此の上は。渡を殺さで添はるべきか。自ら智略をめぐらし密かに討たせ申さんに。先づ母上を許してたべ。さりとはと取付けば鬼の様なる盛遠も。たよくとして立退きて。扱々恐れ多き慮外の段眞平御免なされ候へ。詞去り乍ら袈裟御前。一旦害を救はんとて某をたばかりとも。詮する科は叔母御なれば必ず後の悪しからんと。地にがくしく申しければ袈裟御前聞召し。何しに偽申すべき。妾よきに合圖してやすくと討たせ奉り。其の後二世と契らん心安く思召せ。如何にくくと宣へば盛遠今は納得し。飽かぬは君が情ぞや。我も公用相勤め京へ罷り上るなり。具してんぞや誰かある馬よ興よと舞いて。人々を先に立て都をさして上りける先約とはいひ乍ら。適氣儘放逸の類少き荒者やと皆怖れぬ。者こそなかりけれ。

二段目

扱其の後。地痛はしや袈裟御前。思ひもよらぬ盛遠の不覺人に出で逢ひて。母の害を通れんため夫の渡を討たせんと。約束せし日限も、フシ今日の今宵になりけり。地折節渡は當番にて其の日は院參せられけり。袈裟御前は爲若をかき抱き。常の一間にしをくと。フシ涙にくれておはせしが。地果敢なや貞女の道を立てんとすれば。母の命を取らんといふ。又孝行の道を立てんとすれば深き妹背の道立たず。とすれば斯かり斯くすればあない知られぬ我が身やな。アアうらめしきは浮世の中。所詮たゞ自らが夫の渡の身代りに。スエテ立つより外はあるまじと。フシ思ひ乍らも恩愛の。まだ幼きこの若が。今年二つといひながら。十月に足るや足らずして母に離れん。フシ不便さよ。斯程に薄き縁ならばなど胎内にて。湯とも水ともなりはせで。思ひの絆長き世のスエテ迷の種かや恨めしや。さは去りながらつれなくも。汝ながらへあるならば遁世修行の身となつても。なき跡とひて得させよえ。さて果敢なやあさましや。斯く有るべきとは露知らで。此の子が成人するならば兎やせん角やと思ひしは。皆仇事やとかき口説き歎かせ給ふを見給ひて。爲若わつと泣き給へば。お乳やめのは駈け來り。なぜむつからせ給ふぞや爲様此方へくと。ほくに抱き乳を含めねんくオッリッおころと。すかしけり。フシ既に其の

日も。地暮方に渡御所より歸らせ給へば北の方立出でて。終日の御勤さぞと察し參らせしと。思ひの色を押包みにつこと笑ひ宣へば。渡此の由聞召し誠いつもと言ひ乍ら。今日は殊更長き日の。暮らし兼ねたる御宿直を思ひやらせ給ふべし。あら氣つまりやと夕露の結ぶ烏帽子の紐を解き。直垂脱ぎ捨てましませば北の方御覽じて。それく御酒と宣へば女房たち承り。銚子かはらけ携へてオクリすでに盃とりぐに。フシ差いつ差されつ宵の間の。月の影さへ傾けば。地最早御身納められよと北の方へ差し給へば。痛はしや袈裟御前はぞ名残の盃と。思へばいとど胸塞がり。せき來る涙に聲ふるひステテ前後不覺になり給ふ。地されども色を悟られじと酒の酔にかこつけて。妾もことなう酔ひぬれども。今一しほと手を取れば。流石岩木にあらし吹く。御室の山の紅葉ばのこがる、ばかり色に出で。とろりくと横になり前後も知らず寝入らるる。地袈裟御前宣ふはいかに女房達。御殿はもはや靜まり給ふに方々も休み給へ。やあ爲若は寢けるか。風ばし地ひかすな乳母とてさあらぬ體に宣へば。女房達は。それぐにオクリおのが部屋にぞ入りにける。地かくて袈裟御前は渡に衣を着せ參らせ。燈火太く掻き立ててステテ只しをしをとしをれ果て。渡の顔をつくく見て。ア、神ならぬ身の果敢なさは。何心なく臥し給ふ

かや。妾は今宵我が君の御命に代るなり。かほどに薄き縁とは。夢にも知らでうちつけに。ステテ交す枕の上にては。契を遙に千年の鶴によそへ。睡言の床のほとりにては齡を共に萬劫の龜にといはひしも。今宵すら皆仇となる此の世こそは薄くとも。來世なほ來世生々世々の内にして。生き代り死に代り夫となり女となりて。あかねさかみん(本ノママ)物をと口説いつ泣いつ白絲の。瀧つ瀬に増す御涙。フシ思ひやられて哀なり。ハルフシよしや歎かじ。過去よりも。地定まる因果なるべきをと心で心を諦めて。けに誠盛遠のさぞ待侘びてましまさんと。一間の戸障子を。靜かに明けて庭に下り路次のあたりに音なひ給へば。地盛遠物陰よりつつと出で如何に如何とありければ。首尾よく候去りながら。未だとつくと寝入られず。時分を計らひ自らが燈火を消し申さん。地それを合圖に忍び入り。亂れ髪にていねけるこそ渡にて候なれ。よく仕了させ給へとて歸り給へば盛遠は。燈火消ゆる合圖をばオクリ今や遅しと待たれけり。地かくて袈裟御前もとの座敷に立歸り。心靜かに我が夫の枕刀をそつと抜き。丈に餘りし黒髪を情なくもふつつと切り。是を形見に見給へと渡の枕に置くまに。火を打ちしめし衣引きかづき。今ぞ最期と思召すステテ心の内こそ悲しけれ。地盛遠合圖に任せ太刀引そばめ忍入り。探り

て見れば亂れ髪。これぞ渡と首。かき切り、フシ提げ飛んで出でらるる。地太刀音に驚き渡むつくと起上り。詞やれ狼藉者通すなと呼ばはれば。地家の子郎黨肝を消し太刀長刀の鞘外し。息をばかりに追つかくる豫て覺悟の事なれば。盛遠も兵を二十騎ばかり具しければ。返し合はせ戦ひしは凄じかりける。三重次第なり。フシ暗さは暗し。地雨は降る敵も味方も知れざれば。渡小高き所に駈け上り。詞やあ松明出せといふ聲を盛遠聞いてはつと驚き。南無三寶。首遠ひせしかと思ふ所へ松明を。耀くばかり出しけり火かけにすかし能く見れば。袈裟御前の首にてありこは情なやたばかられしと。さしにも猛き盛遠もスエテ心亂るゝばかりなり。地今は何をか期すべきと首提げ駈け出でて。詞なうそれなるは渡にてましますか。今宵の狼藉は某遠武藤者盛遠なり。地近頃不覺の至りなれども此の儀に於ては仔細あり。意趣を語り申さん。フシ鎮まり給へとありければ。地渡聞きもあへず何盛遠にてありけるとや。詞御身は一門の内として何の意趣あつてかゝる狼藉し給ふぞ。ヲ、御不審は尤なり。兎角はそれへ参りつぶさに申し入れんとてつかくと來らるる。渡飛びしさつて太刀に手をかけ給へば。いや御用心は無益なりと。地腰の大小諸共に渡の前に投出し。詞近頃面目なき事ながら今宵の女敵は某なり。何分にも御身の

腹の癒足らん程に切りさいなみ。地袈裟御前の孝養に報じてたべ。扱もく、面目なやと、フシ首さし。のべて居給へば。地渡とかう呆れ果て。こは情なや何たる恨ありければ。袈裟をば討たれ候ぞ如何さま仔細あるべきに。スエテはや語られよと宣へば。地いや兎角は申されずはやく討ちて給はれ。いや、意趣をも聞き届けずいかで無下に討つべきぞ。詞ヲ、けに至極せり然らば包まず明かし申さん。斯様、の次第とて始め終りを語り。地御身の爲には妻某が爲には從妹ながら。扱もしづまる所存の程上古にも末代にも。又あるべきとも思はれず。さは去り乍ら女心の果敢なきに欺かれ。生きて再び某が人に面は會されまじ。せめて御身の手にかゝり無念を晴らさせ申さんに。とく、討つて給はれ。是は又袈裟御前の首よきに孝養ましますと。涙と共に出さるれば渡夢とも辨へず。空しき死骸に抱き付き。スエテ消え入るばかりに見え給ふ。地暫くあつて涙を抑へ。扱もく、討ちも討つたり討たれも討たれたり。惜しまぬ習の武士さへ命は惜しき物なるに。況してやか弱き女の身が。如何に賢女の道を立つればとて。斯様に敢なく討たるゝ事。異國にも本朝にもスエテ又と類の有るべきや。フシさは去り乍ら恨みあり。二世と契りしかひもなく。つゆばかりも知らせぬは。後に残りて某に。物思へとのかねごとか。

南無三寶しなしたりしなしたり如何に盛遠。あつばれ御身も侍かな。來にくき處へよくも來たり。かく志の妙なるを何むさ／＼と討ち申さん。某とても生き存らへ何の益かあるべき。いざ刺違へん死なんとあれば。盛遠暫く涙を抑へ。扱も御身の所存の段生々世々に忘れじ。此の上はともかくも時刻移して益もなし。いざさらばとて太刀を抜き互に胸に押當てて。今はかうと見えし時母衣川かけ來り。二人が中へ割つて入り。フシ思ひきりたり方々よ。地去りながら静めて物を聞き給へ。御身たちが死したればとて袈裟が歸る身でもなし。只願はくは様をかへ。菩提をとひて給はらば妾諸共往生の。後世には一蓮托生の佛果の縁を結ばんに。ひらさら止まり給へとて。フシ縋り付いてぞ歎がるる。地兩人暫しあぐまれしが。渡涙を抑へ如何に盛遠。老母の諫言偏に袈裟御前が諫めと思へば。一念發起菩提心いざ兎も角もとありければ。詞はて生きんも死なんも御身次第と申さるる。地さあらば此の太刀むざ／＼とは指されじと互に誓つと切り。太刀諸共に西へ投げ涙ながらに別れ行くけに惜むべし／＼。詞渡は生年廿一盛遠は十九歳。地遂に出家遁世し諸國修行に出でらる此の人々の心の内。殊勝千萬なか／＼申すばかりはなかりけり。

三段目

去る程に袈裟に別れし衣川。流れて早き年月をいく春秋か故郷に。スエテ散りにし花の名残とて。地かばかりつらき嬰兒の。稍人と成り十二歳。嵯峨野の奥往生院に學問しておはせしが。或時祖母の庵に歸り。詞扱も師匠の仰には。汝には父もなく母もなし人にすぐれ學問せよ。追付け出家せせんと宣ふが。地如何にして某には父母の無きやらん。スエテ聞かせ給へと歎かるる。地祖母君はつと胸打ちせかれ。すゝむ涙を押止め。詞いやなう御身には父もあり母もあり。それは學問奨めん。地ための戒めぞやとありければ。爲若は聞き給ひ。して又それは何處にかおはしました候ぞ。逢はせてたべなう祖母君と袂に縋り歎くにぞ。今はせんかた涙川せきとめ兼ねておはせしが。ヲ、道理なり去り乍ら。父は發心とけ給ひ奈良の都におはします。母は是を恨み佗び。鳥羽の里へ引籠り和御前を妾に預け。學問させ沙門にせよ。學業積らぬ其の内逢ふまい見まいと誓を立て。別れ／＼になりしなり。父母戀しう逢ひ度くば。只々學問怠るなとフシ誠しやかに申さるる。地爲若心に思はるゝは大和とやらんは程遠し。鳥羽は都の内なれば尋ね行かんと思ひつゝ。扱は學問達せでは對面叶はじとや。然らば隨分勵まん。必ず逢はせ

てたび給へ最早お寺へ歸らんと。幼な心にやさしくも大人しやかにたばかりて。立出で給ふ後
 姿祖母君は見送りて。ア、不便の心根や父には若しや母には扱。何としてかは逢ふべきと、フシ
 倒れ伏してぞ泣き給ふ。されども下女は立出でて。やうく奥に誘ひける。あはれと。いはん
 三 〽かたもなし。フシ無慚なるかな。爲若は。地 すぐに鳥羽へと志し。夕日いざよふ松かけ
 や。千世の古道わけ行けば。ハルシ既に其の日も。くれはとり。あやなや行方いづこぞや。暗
 さは暗し雨は降る。跡へ返るも道見えす。先へはなほし覺束なしエテ。こは如何にせん悲しやと。
 フシ 地に伏し。こがれて泣き給ふ。地 爰にとある庵の内に燈の光見えければ。こは嬉しやと立
 寄りて戸をほとくと音づれ給ふ。内より女の聲として誰人なるぞとありければ。いや苦しう
 も候はず。都がたの者なるが知らぬ道に行き暮れ。殊に雨さへ頻りなれば。一夜を明かさせ給
 はれとフシさもしを。くくとぞ申さるる。地 主扉を押明けて。扱いたはしや未だ年にも足らずし
 て。いかで爰には迷ひ給ふぞ。先づく此方へくと。御手を取りて内に入れオクリよきに、痛
 はり給ひけり。地 爲若申さるゝは誠に今宵の御情。いつの世にかは忘るべき。詞して又爰をば
 何と申す處ぞや。地 斯く物凄き野外れにしかも女性の御身にて。一人住ませ給ふぞとあれば、主

聞き給ひ。詞 さればとよ此の處をば鳥羽の戀塚とて。地 向に立てたる標の石。妹背の中に立つ
 なみの。あはれを止めし、フシ戀塚とて。往き來の人の手向草。露の憂き身の。置き所。しばし
 とてこそ住み侘ぶれと。餘所のあはれに宣へば。地 扱は左様に候かや。それに付き此の所にて
 若し源の渡の妻。袈裟御前と申す人ばし御存じにて候はずや。地 主興ざめたる風情にて。詞し
 てそれは何の爲御尋ねとありければ。いや何をか包み候べき。地 其の袈裟御前の爲に我等は子
 にて候なり。なに爲若にてありけるか我こそ尋ぬる母なるは。なう母上とや、フシ是は誠か夢な
 るかと。互に鼻と抱き付き聲も惜まず泣き給ふ。地 爲若涙と諸共に扱もく、情なや。程遠けれ
 ば是非もなし斯く近々にまし、十年にあまる春秋を。よくもく、今迄は逢ひも見もせでま
 しませしア、。心強の母上様やと、フシ恨み。かこたせ。給ひけり。チ、道理なりことわりや。
 我もさこそは思へども。心に任せぬ事あつて空しく爰に住み侘びぬ。扱々いたう成人せしもの
 かな。妾無くても姥君のいとほしみ深き故と。思ふにつけて姥君は恙なくおはするかや。爲若
 聞給ひなかく、堅固にましますに何とて京へはお歸りあり一所にはましますで。斯くあさまし
 きあばら屋に。一人侘びさせ給ふぞや。親なき身をば侮りて或者の申せしは、詞 汝が母は遠藤

武者に討たれたると告げければ。假令湯水の底迄も尋ね求めて一太刀恨み。地御孝養にと思ひつゝ、姥君へ尋ねれば。それは人の偽りよ。鳥羽の里に在りけりと聞くよりいと懐かしく。尋ね來りしかひあつて嬉しく御目にかゝるゝ事よ。兎角我等が行末を。不便と思召されなば。都へ歸り給はれと。フシ又さめんとぞ泣かれける。地母は涙を抑へ妾も少し故ありて。お事にも此の世では。逢ふまい見まいと思ひしかど不思議の縁に相見しなり。明けなば具して歸らんにはや夜もいたう更けぬるは。まどろみ疲をはらせよや妾も諸共添臥しにと。涙に濡れし袖と袖打覆ひ臥し給へば。爲若夢とも現とも。いさしら眞弓引きかづき前後も知らずに寢入りけり。ハルフシ母は此の由。御覽じて。後れ髪をかき撫で。ア、あどなやなあさましや。あこがれ出づる亡き魂を。此の世の物と思ひ寢の醒めてはもとのつらさぞと。思へばく不便やとスエテ伏し沈みてぞ泣き給ふ。やあ爲若よ。先程言葉の言ひ捨てに。敵とあらば恨みんと幼な心の底深き。罪の報いをフシ如何にせん。やれ是なる古塚は敵討ちたる人々とや。憂き世の人の目にこそ見えね。夜に三度日に三度瞋恚のほむら燃え上る。修羅の苦患を夢ながら能く見覺えて盛遠を。討たんとばし思ふなと語りも果てぬに修羅道の。時の太鼓の音高く古塚二つにさつ

と割れ。さもあさましき武士のスエテ太刀を逆手に杖につき。よろりくと。よろほひ出で。苦しげなる息をつぎ。茫然として立ちたりしが。又二つの塚の中より血刀を持って飛んで出で。火出づるばかり戦ひしは恐ろしかりける。三重はけみなりフシ遂にあへなく。地寸々に切るよと見れば起き上り又は切つつ又は切られつ或は我が身を切りちらし。あつとばかりの一聲にてフシ猛火に。焦れ失せにけり。地やああれを見て爲若よ。必ず敵に仇をすな。仇をば恩にて報じの念佛申し得させよや。ア、名残惜しとは思へども愛着念の恐ろしさに。最早や歸るぞさらばとて泣くく塚に入り給へば爲若夢さめかつばと起き。なう母上様母上と抱き付けば古き石。ありつる庵のかけもなし。扱は夢かや現かや。現になりとも今一度見えさせ給へ母上と。フシ塚の上に倒れ伏し流涕。こがれ此の下に。母上やおはすらん。さりとは今一度言葉をなりとも交させたべ。何とていなせをし給はぬぞなう母上様とてフシ地に伏し。叫ばせ給ひけり。地斯かる哀れの折節に。あたりに棲める野犬ども歎きの聲に驚きて。爲若をおつとり込め喰ひ付かんと吠えかゝる。こは悲しやと悶ゆれどもいづくへ逃けんやうもなく。フシ小太刀を抜いて拂はるる。地誠に孝の志天も憐み給ひてや。數羽の鳥飛び來り彼の犬どもを蹴散らせば。さし

もに猛き野犬ども天道に恐れてや。皆ちり／＼に逃げ失せし跡に群がる村鳥。一度にはつと飛び上りア、。かはい／＼。かはい／＼と啼く聲に夜はほの／＼と明けにけりかの。爲若の歎きのてい。理せめて尤やと皆感ぜぬ者。こそなかりけれ。

四 段 目

斯くて其の後、無慚なるかな爲若は。戀しき人に逢ふと見し。夢の中なる夢さめて。スエテ途方涙のたらちをば。大和に在りと幽霊の。其の言の葉を頼みにて未だ末長き命にも。まさりて惜しき別路の。名残果敢なき墓所。暇の念佛回向をば。フシオクリ櫓の露の。消え失せしフシ母は現に。見えしかど。父にはいつか青丹よし。奈良の方へと心ざす。スエテ道のよすがにつく杖の。竹田に通ふ。小オクリ力車のとんどろ。とゞろと。轟く音にウフシ驚きて。寢所出でし朝鳥。なれも親子のあればこそ。三つ四つ連れて鳥羽の里。フシそなたに靡く秋霧の。ハルフシ風のまにまに。隙見えて。あかねさす日も。フシ紫の。藤の森くるかけ高し。草木の名さへ知らぬ身が。旅の宿に今宵はそも。誰と伏見の野邊に咲く尾花。フシ交りの萩桔梗。幼な心のあやなくも。花にや憂さを忘れけん。一枝折りて打笑ひア、美しくの錦よの。末葉に置くは。白玉かやさしき

物よ何ぞとて。フシ拾へば消ゆる露のあだもの又消え／＼と。手折りし花を投捨てて。スエテ母戀しとぞ泣き沈む。フシ涙恥かし我にちと貸せ。月は笠着て有明の。影も小倉の堤に續く。フシ里のかけひの長池や。ハルフシ鳩の浮洲の。浮く瀬があれば。沈む瀬もある。フシ理も。まだいはけなき子心に。何とて思ひ白菊に。おきまどはせる霜消えて雫せはしき。玉水の落ちて。こほれて積れば末に。ハツミ流れ木津川瀬をはやみ。スエテ脛打越ゆるさゞ波に。足もたよく／＼たよりになく。晝日も夕暮に奈良坂や。この手柏の葉がくれを忍びて通ふ稻妻に。薄や波羅密般若坂。昔男と業平のかの垣間見もさぞなこの。春日の里に着きしかば。今は紅葉の八重櫻。長地角振り立つるさを鹿の目なれぬ姿の後めたさに歩みもやらすたど／＼と。立ち休らひておはします心の。内こそ。三置、あはれなれ。是は扱置き。地左衛門尉源の渡は往じ仁平の頃。遠藤武者盛遠に妻の袈裟御前を討たせ。是を出離の縁とし遂に修行成就して。東大寺の住侶俊乗坊重源とて。フシ世に著くぞ聞えける。地重源思ひ立ち給ふは。既に聖武皇帝は最愛の夫人に後れ。其の菩提の爲にとて金銅十六丈の盧遮那佛を御建立ある。いとまかしこき勅題にたとへば恐れ多けれども。伽藍大破に及びたり我も亦妻のため。如何にもして此の大佛殿修造せんと思ひ立

ち。國々浦々里々迄大勸進を修行あり。祈願既に事成れども猶結縁の爲ぞとて。奉加帳を手づから持ち。大和大路に立出でて。往き來の人を勸めんと。勸進帳を押開き。高らかにこそ讀まれけれ。〽それ。つらく。惟れば。大恩教主の秋の月は。涅槃の雲に隠れ。生死長夜の長き夢驚かすべき。フシ人もなし。こゝに中頃。帝おはします御名をば。聖武皇帝と名付け。奉り最愛の夫人に別れ。戀慕止み難く。涕泣眼にあらく涙玉をつら。ぬく思ひを。善路に翻して。フシ盧遮那佛を建立す。かほどの靈場の。絶えなん事を。フシ悲しみて。俊乗坊重源。諸國を勸進す。紙半錢の。奉財の輩は此の世にては無比の樂に誇り當來にては數千蓮華の上に坐せん。歸命稽首敬つて白すと。フシ天も響けと讀み給ふ。地往來の貴賤聽聞し舉つて奉加を。三〽付けにけり。フシかゝりける處へ。爲若も行きかゝり。扱有難き勸めやな是を奉加し申さんと。金作の筭を。するりと抜いて出さるる。重源筭を取上げて御假名はとありければ。源の渡が一子爲若丸。悲母菩提の爲とつけてたべ。重源はつと驚き。なに御身は源の渡の子息なりけるかや。扱何として此の所へは來り給ふとありければ。いや別儀にて候はず。某未だ二歳の時見捨てて父は發心とけ。地今此の所におはするよし。いづくにかおはすらん若し御存じにて候はば。教へ逢は

せて給はれなうお聖と歎くにぞ。さしもの大道心我が子と聞くに胸塞がり。すゝむ涙を止め兼ねスエテしばし。咽んでおはせしが。エ、あさましし我が心。大願の障ぞと。智劍を振つて愛着の絆ふつつと切り。扱いたはしや遙々と尋ね給ふかひもなく。御身の父は去年春なくなり給ふと宣へば。爲若夢とも辨へずそれは誠か悲しやと。其の儘其處に倒れ伏し悶え。こがれ泣き給ふ。落つる涙の隙よりも。ア、情なや今迄はさりとと思ひしに。皆あだ事と成り果てし。父母の跡ばかり尋ね迷ひし憂さつらさ。是は如何なる因果ぞやとてフシ聲も。惜ます歎かるる。爲若の歎きを見て。重源今は心消え。さてく不便やな只名乗らん。いや待て暫し。恩愛不能斷南無三寶迷うたか。第六天の魔王。我が子となつて菩提心を妨ぐると覺えたり。詞あら勿體なやと思ひ切り。如何に爲若殿。御歎きは理なれどもはや返らぬ道なれば。御身も出家遁世し父母の菩提を弔ひ給へ。地幸ひ愚僧は重源と相弟子の事なれば。共に香花取るべきと。フシ涙ながらに宣へば。扱は故ある御方かな。尤も仰に従ひ度くは候へども。恩を見て恩を知らぬは鬼畜とやらん承る。故郷にまします姥君に。多年高恩蒙れば。せめては斯くと知らせつゝ其の後には兎も角も。又ぞや參り御苦勞に罷り成り申すべし。最早お暇申さんがなう如何なれば御僧

様。父母としては知らねども我が親の別れ路が、斯様に名残惜しからめ跡へは足が引かるれど。先へとは行かれぬはとスエテ倒れ伏してぞ泣き給ふ。地思ひ切つたる重源も。此の有様を見るにつけいと心は。亂るれども親子の間を悟られじと。やうく宥め涙ながら別れくりに三重なり給ふ。是はさて置き。地遠藤武者盛遠は十九歳にて發心遂げ。其の名を文覺と改め凡そ日本國中を遍巡りて。難行苦行功積り。今は飛ぶ鳥も祈り落せば落つるなる刃の驗者と成り給ひ。高尾山神護寺にフッ行ひすましておはします。地かゝる所に爲若丸奈良の都をだち歸り。文覺のありかを聞き母の敵のことなれば。せめて一太刀恨みんと直に高尾に尋ね入り。門のほとりに立寄りて物申さんとぞ申さるる。詞折しも文覺出で給ひ何事さうとありければ。いや苦しうも候はず。某は學問の望あり。召使ひ給はれとにつこと笑ひ申さるる。地元よりも文覺には物が告ぐる事なれば。はや斯くと知り給へどさあらぬ體にもてなし。ヲ、やさしき志。地さあらば此方へくと奥に呼び入れそれよりも。晝夜側にて使はるゝオクリ心の内こそ不敵なれ。地かくて爲若は隙間もがなとねらへども。此の文覺といふ法師面魂異相あり。不敵第一の荒聖。威に恐れをのきてフッ空しく。月日を送らるる。地或時文覺動行に疲れてや。護

摩の壇を枕とし高駢して臥し給ふ。すは屈竟の折柄と太刀引ん抜いて忍び寄る。不思議や壇に立ち給ふ不動の利劍飛んで出で。ひらりくと防ぎしはさながら射る矢の三重々如くなりフッされども爲若。地隙を見て太刀さしかざしかゝらるる。又左の御手なる縛の繩小蛇となり。飛びかゝつて爲若の太刀をきり、とひん巻いて。切先を衝へしはフッ俱梨迦羅不動と謂つべし。地はつとをのき飛びしさり暫し呆れてまします所に。文覺手足をぐつと伸べ。大欠伸してからからと笑ひ。扱も不便や爲若。御分渡が一子とは始めより知つたれども。とても浮世を捨つる身の討たば討たれんと思へども。如何なれば明王の斯く迄惜み給ふらん。いとやさしくも思ひ立つ一念の空しくて。嗚や本意なく思はんと鏡の様なる眼よりスエテ涙を。はらくとぞ流さるる。地爲若今は手を合はせ。ア、勿體なや忘まはしや。許させ給へ此の上は悪念を翻し。善縁にもとづかんと我と髻切らんとす。文覺は御覽じて當つて碎くる瀧つ波。流も清き源の渡が一子なりけるぞ。去り乍ら我が行は苦行にして事むづかし爰に東山新黒谷に。法然上人とて智識あり。此の御弟子となさんとて。則ち自ら召し具して新黒。谷に急がる、彼の。文覺の御法力誠に不動の御再誕かと皆感ぜぬ。ものこそなかりけれ。

五段目

去る間、文覺上人は爲若を伴ひて。新黒谷になりしかば。法然立ち出で對面あり。フシ御もてな
 しは淺からず。地文覺申されけるやうは。詞是に候幼き者は先年遁世致せし。源の渡入道が一
 子爲若と申す者にて候が。斯様々々の次第にて。愚僧を頼む由申し候間召連れ參上致し候。
 御弟子となされ亡母の香花をも取らせてたべと懇ろに申さるる。源空聞召しあつばれの、しき
 結縁や候。御覽の如く方々より頼まれたる。先輩の兒達數多候へば出世の超越はかなはずとも。
 吉日にまかせ先づ剃髮させ申すべしと。地師弟の契約遊ばされ。念佛易行の御法談又文覺は眞
 言究竟の物語。顯密二道に變れとも。萬法一如の得道は。フシ符節を合せし如くなり。地かゝる
 處へ萩原の中將勅使として御入寺あり。法然やがて出迎ひオクリ勅使を、上座に請ぜらる。地中
 將笏取直し宣旨餘の儀にあらず。地南都大佛再興の事。俊乗坊重源勸進によつて成就の奏聞こ
 れあり。來る三月十三日。良辰たるによつて開眼の御修法もつとも八宗の法師。就中法然上人
 導師たるべきとの勅説なりと述べらるる。法然謹んでお請あり。夫につき幸の佛縁こそ候へ。
 これなるは盛遠入道文覺。扱重源が一子爲若と申す者にて候が。此の度の供養に參會致させん

と存す珍重にこそ候へと。地御物語ありければ中將聞召し。然らば某又是より。南都へ勅使に
 下り候間。重源にも其の段を申し聞かせ候べし。先づ、暇申すとてオクリ勅使は、御寺を出で
 給ふ。地其の後文覺法然に向ひ。詞就いては爲若父とも母とも頼みたる姥の尼公嵯峨野の奥に
 在りけるが。今は住家を變へ在所知れず候由剃髮致さぬ其の先に。今一度逢ひ度き由歎き候と
 あれば上人聞召し。地けに不便なる心ざし感じ入つてこそ候へ。然らば源空が所存ありとやが
 て安樂坊を召され。詞明日心ざす結縁あり。地決定往生の血脈を。出すべき旨ふれさせよ畏
 り候と。力者の僧に言ひ含め洛中残らず。三重、ふれにけれ。フシ優婆塞優婆夷、地比丘比丘尼
 我も我もと群集して、フシ御血脈をぞ請にける。地かくて上人は爲若を始め其の外の小兒たち。
 花の如くに立出たせ參詣の諸人に打向ひ。詞此の度の結縁餘の儀にあらず。源空不思議に弟子
 を儲け近日出家致させ候。俗稱は嵯峨源氏。前の左衛門尉渡が一子爲若といふものなり。若し
 其の所縁の候はば今日の法事に會ひ給へと。地宣ひも果てざるに七旬ばかりの老比丘尼。諸の
 參詣を押し分け。押し分けなう妾こそ。其の爲若が姥さぶらふ。やれ爲若か是は、とばかりにて
 泣くより。外の事ぞなき。地群集の貴賤諸共に、フシ奇異の思ひをなしにける。地尼公は上人に

向ひ此の子御弟子と罷りなり。母や妾が。後世菩提弔はれん事こそ嬉しう候。去りながら只一人ある幼兒を。出家になさんも本意なければ。とてもの事に御惠をもつて。元服せさせ。父が弓矢の家をも繼がせ度く候が。如何あらんとありければ法然笑はせ給ひ。調尤も女儀の心にて左様に思すは理なれども。知人間の形を以て生死の火宅を繼がんとならば人の命は限りあり。遂に一度は滅すべし。只常住安樂の都に心を以て到らしめ。不生不滅の家を繼ぎ。父も母も諸共に老いず死なすの門に入り。病なく憂なく暑からず寒からぬ。富貴の家を此の。源空が譲らんに何の不足か候はん。いでく九品蓮臺の住家の體を語らせて聞かせ申さん。聽聞あれと宣ひて。爲若丸諸共聲を上げオクリ九品の次第を語らるる。それ下品下生の往生は。六道四生の苦患を稍通るゝばかりにて。十二劫が其の間蓮華中に孕まれ。忙々。然々として明かし暮らし。やうく其の劫満つる時蓮華開けてや。中品に中生す。扱中品中生こそ。よに有難き大往生のウフシ素懐なれ。上品蓮に到る間は。一誕生六十餘刹那として此の。此のく瓜彈する間に。忽ち中品の。蓮華開けて上品上生に往生し。スエテ無数の餘樂を受くるなり。先づ其の身を自ら願ればハルフシ紫磨黄金の。肌こまやかに。三十二相あらはれ。瓔珞莊嚴の袈裟衣。出で入る息

は。旃檀の香薫じ口には青蓮華の莖を含み。内外共に清淨に光明遍照赫耀として。悠々自在雲に乗り。風御しては虚空に坐せしめ。宙をかけり心の欲する所に行く。扱又常の宮殿は。金銀瑠璃。玻璃。磲磈瑪瑙珊瑚琥珀水晶を。磨き立て磨き立て。玉を彩色へて造り立てたる臺には金の寶鐸銀の鳧鈴。常樂我淨の風吹けばオクリ微妙淨音フシ玲々と。妙法の法を説く。扱又大寶蓮華の下。八功德池は甘露の水。清々と清らかに。フシ妙法蓮華が咲き亂れ。ハルフシ異香四方に芬々たり。鳧雁鴛鴦囀りて。スエテ曠恚の穢を清むなり。園には玉の梢をつらね。八色五色のフシ花開け。孔雀鸚鵡や。頻迦鳥。色々の音を出せば空には歌舞の菩薩。無量の化佛現れて音樂天に響くなり此の寶國の樂みは假令百千俱胝那由佉劫を経て。百千萬那由佉の舌の上に無量の聲を出し。一々もつて褒むるとも淨土の莊嚴。褒め盡す事能はずか。目出度き玉の住家へ我も人もおしなべて。到らん事こそ嬉しけれと語り給へば。姥君も。喜び勇み爲若を上人に奉り。念佛修行の大道人と譽を。四海に耀かせし光明坊とはこれなりけり。佛法繁昌君繁昌天下泰平萬々歳目出度きともなかく申すばかりはなかり。

右此本者依小子之懇望附祕密
音節自遂校合令開板者也

加賀 掾

宇治

好 澄

二條通寺町西へ入町

山本九兵衛 刊

大正十一年九月八日印刷
大正十一年九月十一日發行



(近松門左衛門全集第一卷)

定價金貳圓五拾錢

編纂者 高野 勘辰 藏之

發行者 和田 利彦

印刷者 土谷 清隆

印刷所 株式會社博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地

春陽堂

振替東京一六一七 電話本局五十一
四二一〇

圖書目錄贈呈……往復葉書にて御申込次第 春陽堂

高野斑山氏 校訂
黒木勘藏氏

三六判布表裝天金本

近松門左衛門全集 全十卷

各卷 金貳圓五拾錢 送料拾貳錢

此全集の集

輯集の豊富……淨瑠璃と歌舞伎狂言と合せて百四十篇、其三十篇は未
翻刻の珍書。
歌舞伎狂言本十六篇……近松の作の一面を示す貴重品。本全集の誇。
底本は古刻……一切古正本に據り、異本を参照して、従前の翻刻書に
基かず。
校正の嚴密……假名遣の訂正、佛語漢語に對する用字の正格（但訛語

七大特色

方言は元の儘）句切及び曲節附の保存。
挿繪の珍貴……繪入細字本及び狂言本から採つて、毎卷挿入十數葉。
場面観察の好資料。
作品の排列……内容と傍證とによつて、新に立てた時代順。最も苦心
の存する處。
研究の手引……劇の歴史、作者の傳記、著作の解説。（序卷）

序卷

義大夫劇の日本劇史上に於ける地位、近松門左衛門の傳、著作年表、著作の解説並
に梗概。

第一卷

元祿四年迄

花山院后評、赤染衛門榮花物語、つれづれ草、世繼會我、伊呂波物語、門出八島、
凱陣八島、源氏烏帽子折、百夜小町（狂言本）、夕霧七年忌（狂言本）、出世長清、三
世相、佐々木先陣、會我七以呂波、天智天皇、十二段、水木辰之助錢振舞（狂言本）、
大覺大僧正御傳記、東山殿子日遊、戀塚物語。

第二卷

元祿十一年迄

念佛往生記、本朝用文章、日本西王母、摩耶山開帳(狂言本)、今川了俊、松風村雨束帶鑑、釋迦如來誕生會、鎌田兵衛名所盃、傾城阿波鳴門(狂言本)、賴朝伊豆日記、根元會我、團扇會我、當流小栗判官、一心二河白道(狂言本)。

第三卷

元祿十五年迄

一心五戒魂、傾城佛の原(狂言本)、阿彌陀池新寺町(狂言本)、浦島年代記、姫藏大黒柱(狂言本)、傾城富士見里(狂言本)、下關猫魔館、蟬丸、天鼓、會我五人兄弟、大磯虎稚物語、賀古教信七墓廻、傾城壬生大念佛(狂言本)、薩摩守忠度、主馬判官盛久。

第四卷

寶永三年迄

傾城三の車(狂言本)、最明寺殿百人上臈、會根崎心中、唐崎八景屏風(狂言本)、薩摩歌、吉祥天女安産玉(狂言本)、雪女五枚羽子板、用明天皇職人鑑、源義經將茶經本領會我、加増會我、心中一枚繪草紙、兼好法師物見車、基盤大平記、卯月紅葉、會我扇八景。

第五卷

寶永七年迄

吉野忠信、堀川波鼓、卯月の潤色、酒吞童子枕言葉、心中重井筒、傾城反魂香、心

中萬年草、待夜小室節、淀鯉出世瀧徳、五十年忌歌念佛、御曹司初寅詣(狂言本)、槍狩劍本地、會我虎が磨、今宮の心中、百合若大臣野守鏡。

第六卷

正徳三年迄

心中又は氷の朔日、孕常盤、夕霧阿波鳴門、源氏冷泉節、吉野都女楠、大職冠、傾城懸物揃、弘徽殿鴉羽産家、姫山姥、長町女腹切、傾城吉岡染、天神記、榮靜胎内裙、冥途飛脚。

第七卷

享保三年迄

相摸入道千匹犬、娥歌加留多、嵯峨天皇甘露雨、大經師昔曆、持統天皇歌軍法、生玉心中、國性爺合戦、國性爺後日合戦、槍の權三重帷子、聖徳太子繪傳記、山崎與次兵衛壽の門松、日本振袖始、會我會稽山、傾城酒吞童子、日本振袖始(狂言本)。

第八卷

享保九年迄

博多小女郎波枕、善光寺御堂供養、本朝三國志、平家女護島、傾城島原蛙合戦、井筒業平河内通、雙生隅田川、日本武尊吾妻鏡、心中天網島、津國女夫池、女殺油地獄、信州川中島合戦、唐船嘶今國性爺、心中宵庚申、關八州繫馬。

第九卷

補遺の卷 悉皆未翻刻書

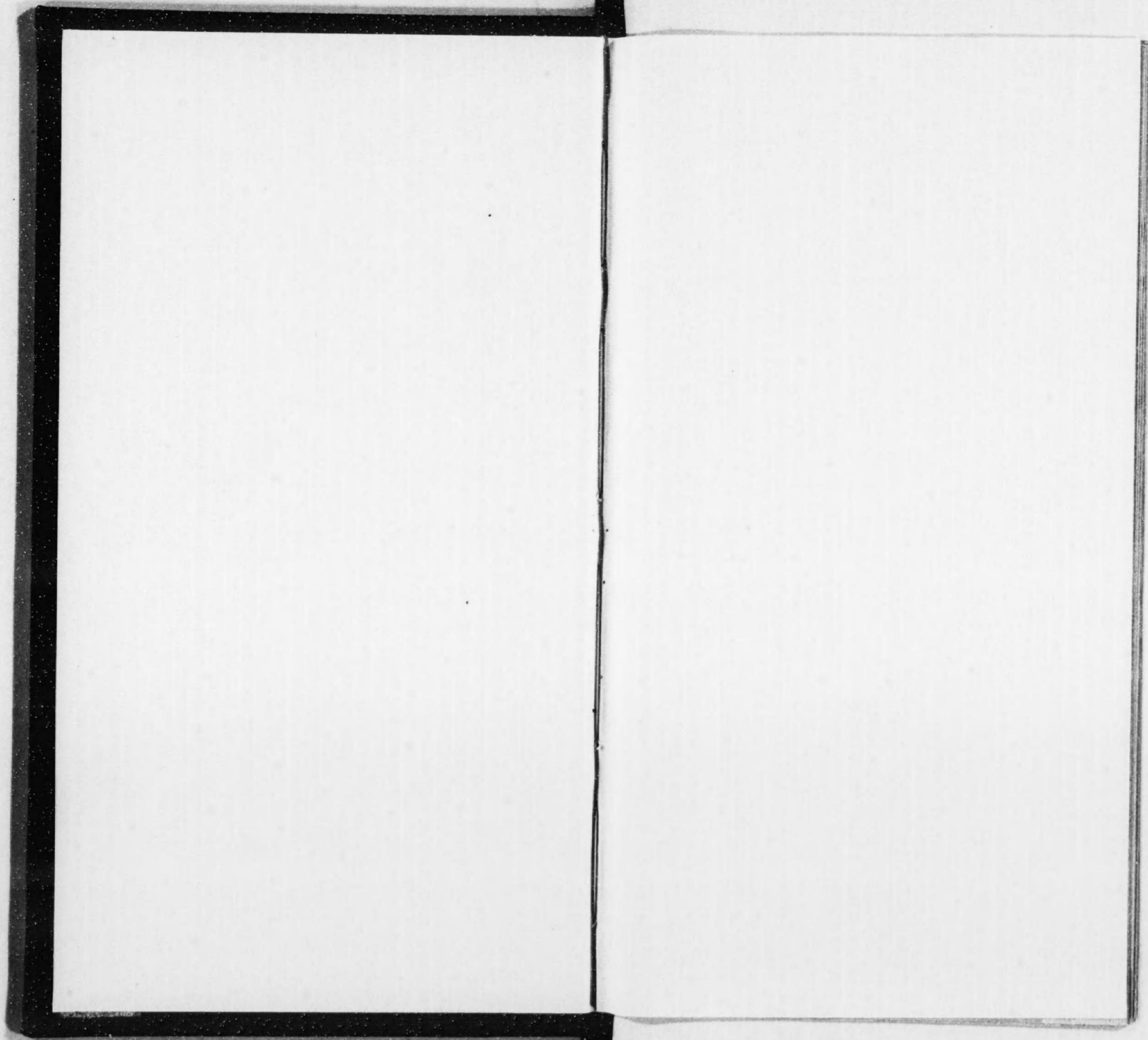
28M-520

名家傑作集

明治大正に於ける大作家の諸作中より傑作を選び、手
 ごろの列冊として刊行するものが、本叢書である。さ
 れば本列冊を通讀すれば、直ちに明治大正文壇の趨勢
 を知り得るのみならず、各冊とも興味多き讀物である。

各冊金八拾五錢
 送料壹冊六錢
 三冊迄拾貳錢
 五冊迄拾八錢

(1) 不言不語 尾崎紅葉	(2) 其面影 二葉亭四迷	(3) 照葉狂言 泉鏡花	(4) 水彩畫家 島崎藤村	(5) 白露紅露 幸田露伴	(6) 野の花 田山花袋	(7) 歸去來 國木田獨步	(8) 十三夜 樋口一葉
(9) 五月幟 正宗白鳥	(10) 月夜の美感 高山樗牛	(11) 彼女と少年 徳田秋聲	(12) 還魂錄 森林太郎	(13) 油地嶽 齋藤綠雨	(14) 歡樂 永井荷風	(15) (未定)	(16) (未定)



終